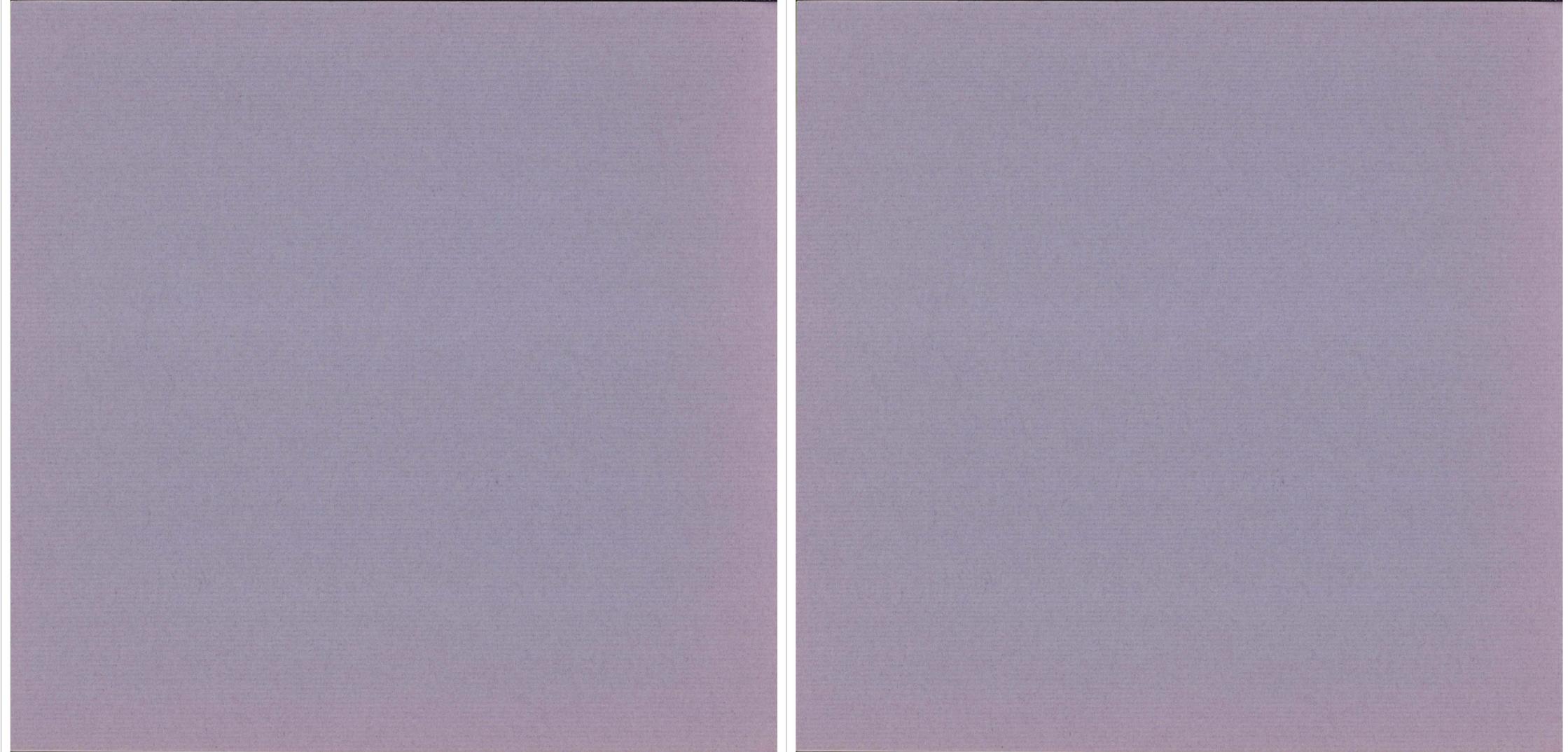


NBS

Japan Performing Arts Foundation
1985



Leonard Bernstein
The Israel Philharmonic Orchestra





The Israel Philharmonic Orchestra

Conducted by

Leonard Bernstein

1985 Japan





The Israel Philharmonic Orchestra Japan Tour 1985

イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団 1985年日本公演スケジュール

Presented by Japan Performing Arts Foundation

9 3	(木) 7:00p.m.	大阪フェスティバルホール Osaka Festival Hall	聖徳学園・川並記念講堂 Seitoku Gakuen Kawanami Memorial Hall, Matsudo	A	B
主催：大阪国際フェスティバル協会・朝日新聞社			主催：聖徳学園短期大学	Program	Program
9 4	(木) 7:00p.m.	大阪フェスティバルホール Osaka Festival Hall	NHKホール NHK Hall, Tokyo	B	B
主催：大阪国際フェスティバル協会・朝日新聞社			主催：日本舞台芸術振興会・民主音楽協会・朝日新聞社	Program	Program
9 5	(木) 7:00p.m.	名古屋市民会館大ホール Nagoya Shimin Kaikan	NHKホール NHK Hall, Tokyo	A	A
主催：中京テレビ			主催：民主音楽協会・日本舞台芸術振興会・朝日新聞社	Program	Program
9 7	(土) 7:00p.m.	ザ・シンフォニーホール The Symphony Hall, Osaka	NHKホール NHK Hall, Tokyo	B	B
主催：朝日放送・大阪国際フェスティバル協会			主催：日本舞台芸術振興会・民主音楽協会・朝日新聞社	Program	Program
9 8	(日) 7:00p.m.	NHKホール NHK Hall, Tokyo		A	
主催：日本舞台芸術振興会・民主音楽協会・朝日新聞社				Program	
			後援：外務省、文化庁、イスラエル大使館・朝日ブリンクニュース社(東京・大阪)		
			制作：ジャパン・アート・スタッフ		

Program A

Program B

グスタフ・マーラー
Gustav Mahler

交響曲 第9番 三長調
SYMPHONY No.9 in D major

レナード・バーンスタイン
Leonard Bernstein

「ハリル」
フルート、弦楽オーケストラ、打楽器のためのノクターン
"HALIL"
Nocturne for Solo Flute, Strings Orchestra and Percussion

フルート独奏：ランサム・ wilson
Flute: Ransom Wilson

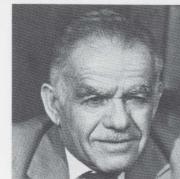
レナード・バーンスタイン
Leonard Bernstein

「ウェストサイド物語」より「シング・ファン・ダンス」
SYMPHONIC DANCES
from "WEST SIDE STORY"

ヨハネス・ブラームス
Johannes Brahms

交響曲第1番 c短調 作品68
SYMPHONY No.1 in c minor Op. 68

RANSOM WILSON PLAYS THE SANKYO RHAPSODY



シャローム

イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団がマエストロ・レナード・バーンスタインの指揮のもとで日本への公演旅行に発つことを聞き、喜んでおります。

同オーケストラは長年に亘り、イスラエルの大天使として外国で優れた活動を続けて参りました。日本公演は3度目になりますが、演奏活動に加えて、このような古来の伝統と新しい文化の両面で卓越したものをもつお国を訪問できることは、重要な意味を持っています。

日本国中にひびき渡るイスラエルの声が、今回は、イスラエル・フィルハーモニックの調和のとれた音色から発せられることを喜んでいます。

副首相/外務大臣

イツハツク・シャミール

Shalom,

I was happy to hear, that the Israel Philharmonic Orchestra, conducted by Maestro Leonard Bernstein is embarking on a concert tour of Japan.

Our Philharmonic Orchestra has for many years served as an excellent ambassador of Israel abroad. There is added importance to it playing, now for the third time, in a country like Japan, which excels in both ancient and new traditions and culture.

It is good that the voice of Israel, that shall be heard throughout Japan, will this time originate in the harmonious sounds of your orchestra.

Respectfully,

YITZHAK SHAMIR
Vice Premier
and Minister of Foreign Affairs



イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団
及び指揮者レナード・バーンスタイン氏へ

日本と米国への公演旅行の開始にあたり、皆様の成功を祈る心からの気持ちをお伝えいたします。

世界の名高い舞台で優れた演奏を行うことにより、皆様は芸術家として、またイスラエル国民として重要な役割を果たし、世界各地の人々の間でイスラエルの名を高めることに貢献しているのです。

心をこめて

副首相/教育文化大臣

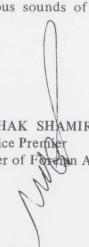
イツハツク・ナヴオン

To The Israel Philharmonic Orchestra
and its conductor Leonard Bernstein,

Upon your embarking on a concert tour of Japan and the United States, please accept my sincere wishes for your success.

By your excellent appearances on the distinguished stages of the world you fulfil a most important artistic and national mission and contribute to enhancing Israel's reputation among the peoples of the world.

With best wishes,


ITZHAK NAVON
The Deputy Prime Minister
and Minister of Education and Culture



今回の日本公演にあたり、イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団とマエストロ・レナード・バーンスタインに心からのごあいさつをお届けできることに喜びと光栄を感じております。

同オーケストラを再び日本に迎える機を得て、私は大変誇らしく存じます。前回の1983年3月の日本公演でIPOは大きな評価を得て賞讃され、日本の音楽愛好家の方々に好まれるオーケストラのひとつとしての地位を固めました。

IPOはイスラエルでは最も重要な文化的財産と考えられており、我國と国民の誇りの源となっています。イスラエル国内をはじめ世界の多くの国々で何千回という公演活動を行い、そのたびに熱狂的な歓迎を受け参りました。

主要オーケストラのひとつとして、IPOはイスラエルから日本の皆様への親善大使の役割を担って参りました。世界最高の指揮者のひとりであるマエストロ・レナード・バーンスタインの指揮のもとに行われる演奏会が、最高レベルのすばらしいものとなることに疑いの余地はありません。音楽に対する愛情と理解力では定評のある日本の聴衆の皆様が、これまでの日本公演と同様に、IPOの今回のコンサートを楽しんで下さることを願って止みません。

IPOの日本公演を実現して下さった日本舞台芸術振興会に、心からの感謝の気持ちを述べさせていただきますと共に、この公演を通じ、イスラエルと日本が、国家同士、国民同士の暖かな友情に満ちたつながりを、より一層強めていくものと確信しております。

駐日イスラエル大使
アムノン・ベン・ヨハナン

AMNON BEN-YOHANAN
The Ambassador of Israel



財団法人日本舞台芸術振興会、同民主音楽協会等の主催によりイスラエル・フィルハーモニー管弦楽団の演奏会が、東京をはじめ大阪、名古屋などで開催される運びになりましたことをお喜び申しあげます。

イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団は1936年の設立当初から「弦のイスラエル・フィル」といわれ、そのつややかで繊細な弦の響きは高い評価を受け、現在では世界のトップ・クラスをゆくオーケストラであるとお聞きしております。

一昨年の来日に続く今回の公演会では、輝しい足跡を残している巨匠レナード・バーンスタイン氏の指揮により演奏されますが、氏のつくり出す音楽は聴衆に深い感動を与えてくれるものと期待しております。

この公演の開催に尽力された関係者各位に敬意を表しますとともに、公演の御成功と、日本とイスラエル両国の文化交流が一層促進されることを祈念いたします。

文化庁長官 三浦朱門

SHUMON MIURA
Commissioner General for Cultural Affairs



このたび「レナード・バーンスタイン指揮イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団」をお迎えするにあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

「イスラエル・フィル」は、ヨーロッパのユダヤ系音楽家を結集して、1936年に創設されたオーケストラで、第1回の演奏会をトスカニーニが指揮し、栄光の第一歩を歩みました。

今回このオーケストラを率いるのは、今世紀を代表する音楽家のひとり、レナード・バーンスタイン氏です。ご承知のとおり、バーンスタイン氏は、指揮者としてのみならず、作曲家、ピアニスト、教育家としても輝かしい足跡を残しております。今回の演奏会でも氏の作曲した作品が演奏されますので、必ずや皆様を魅了してくれるに違いありません。バーンスタイン氏と「イスラエル・フィル」の密接な関係は、1947年以来のことですが、近年の充実ぶりは目ざましく、この指揮者とこのオーケストラならではの豊潤な響きを堪能させてくれるものと期待しております。

末筆ながら、達来の芸術家各位を心より歓迎しますとともに、本演奏会の実現にご尽力いただきました民主音楽協会、朝日新聞社をはじめ、関係各位に厚く御礼を申し上げます。

財団法人 日本舞台芸術振興会
理事長 坊秀男

HIDEO BOH
Chairman, Japan Performing Arts Foundation



二十世紀の巨星とも言うべきレナード・バーンスタイン氏が古くから親密な関係にあるイスラエル・フィル（IPO）とのコンビを初めて日本の聴衆の前に披露してくれることになり、主催者としてこれ程の喜びはありません。

バーンスタイン氏の音楽活動は指揮者、作曲家、ピアニストとしても実に幅広く、我国でもレコードなどを通じて多くの作品や演奏が紹介されて参りました。

まだ日本にレコードでしか紹介されていない同氏とイスラエル・フィルとの息の合った演奏こそ、私共の永年の夢か実現したと言えましょう。

又、今回のプログラムにはバーンスタイン氏の自作や最も得意とするマーラーの作品を盛り込んだ熱い入った、円熟味あふれる演奏が期待できるものと確信しております。

最後に本公司にご協力下さいました関係各位に心から感謝申し上げます。

財団法人民主音楽協会
代表理事 姉小路公経

KIMITSUNE ANEKOJI
President, the Min-On Concert Association



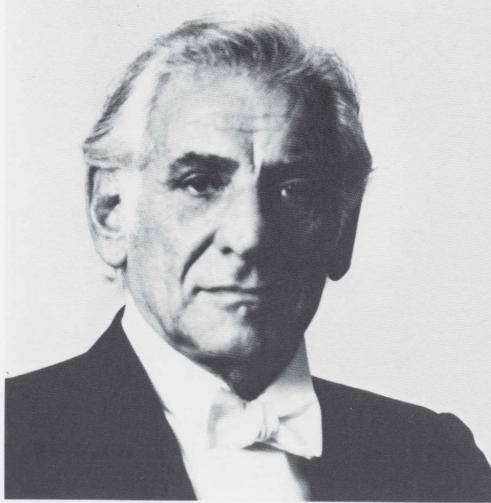
「イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団」は1936年、ユダヤ系ポーランド人の名バイオリニスト、プロニスラフ・フーベルマンによって創設されました。ナチスに追われ、ヨーロッパ各国に散って行ったユダヤ系演奏家たちを結集するのが目的でした。第1回演奏会では、トスカニーニがタクトを振りました。つややかで繊細な弦の響きを特徴とし、わが国でも多くの音楽ファンに「弦のイスラエル・フィル」と親しまれています。

今回の来日は3度目で、指揮はアメリカの作曲家、ピアニストとしても高名なレナード・バーンスタインです。最近は、管楽器の演奏についても高く評価されるイスラエル・フィルですが、バーンスタインの指揮によって、一層輝きと重厚味が溢れ、その演奏はきっと私たちを魅了してくれるこでしよう。

本公演の実現にご尽力頂きました日本舞台芸術振興会に心から敬意を表すとともに、ご協力を賜りました関係各位に厚くお礼申し上げます。

朝日新聞社
社長 一柳東一郎

TOICHIRO HITOTSUYANAGI
President, the Asahi Shimbun



1918年8月25日マサチューセッツ州ローレンスに生まれ、ボストンで育つ。ヘレン・コーン、ハインリヒ・ケプハードにピアノを学んだのち、1935年ハーバード大学に入学。ティルマン・メリット（理論）、ウォルター・ピストン（対位法）、エドワード・ヒル（管弦楽法）に師事した。さらにミトロブロスの勧めによりカーティス音楽院にて勉強をつづけ、フリツ・ライナーに学ぶ。1942年にタンブルッドでクーセヴィツキーのアシスタントとなって研鑽を積み、翌43年にはロジンスキイの推薦によって、ニューヨーク・フィルの副指揮者になった。この年の11月14日、ブルーノ・ワルターの代役で指揮し、劇的なデビューを飾って注目を浴びた。

1945年から48年まで、ニューヨーク・シティ交響楽團の指揮者となり、1957年から71年にかけて、ニューヨーク・フィルの「青少年コンサート」の音楽監督、指揮者をつとめた。1958年には同オーケストラの音楽監督に就任したが、アメリカに生まれ、アメリカに学んだ音楽家が、この重要なポストについたのは初めてだった。その後11年間にわたりこの地位にあり、演奏にレコーディングにとエネルギー満々な活動をつづけ、ニュー

ヨーク・フィルの黄金時代を築いた。

1969年、ニューヨーク・フィルの音楽監督の地位を辞任し、「桂冠指揮者」の称号を得て、その後も欧米においてめざましい指揮活動を展開し、ウィーン・フィルをはじめ各地の音楽祭に客演するとともに、ニューヨークのトロボリタン、ミラノのスカラ座、ウィーンの国立歌劇場などでオペラの指揮をし、この分野でも高い評価を得ている。

バーンスタインの活躍は指揮だけにとどまらず、作曲家としては3つの交響曲、3つのソルフェウス、2つのオペラ、合唱とオーケストラのための「チチェスター詩編」、「セレナード」など、さまざまな様式の作品を創作しているほか、「ウェストサイド物語」などのミュージカルの傑作も世に送り出している。さらにピアニストとしても高く評価され、著者、教育者として、新しい世代の音楽ファンを育てている。バーンスタインはまさに時代が生んだ才人であり、その誰にも真似のできない幅広い活躍こそが、バーンスタインの音楽の魅力になって、人々の心を捉えている。



イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団

音楽監督：ズービン・メータ

●第1 ヴァイオリン

ハイム・タウブ
(コンサートマスター)
ウル・ビンカ
(コンサートマスター)
モージェ・ムルヴィツ
(副コンサートマスター)
メナヘム・ブライマー
(副コンサートマスター)
イズギア・ブライエール
マリナ・ドルマン
ラニアエル・フレンキエル
ロザカ・アイスブ
ズバヴィ・カララン
ラニアエル・マルクス
アラハム・メメード
ロバート・モゼス
ロバート・ボラト
アブナ・ロフスキー
ツヴィ・セガール
エグヴ・シュトウス
モルデハイ・ユヴァル
バヤ・ユシム
マクス・ザルモヴィッチ
●第2 ヴァイオリン
エリヤム・ザルツマン
ラザベル・シュヌル
イソラック・ゲラス
シメオン・アベガヴィチ
シュラミット・アルカレイ
ヘーリー・ブレントル
エリエル・エヌラスティン
イーガル・フリシヤー
ナフーム・フルマン
セヒタ・ゴルダーベルグ
ナタン・グリーンベルグ
レヴィア・ホフスタイン
エリヤベス・クルーブニク
カルメン・レヴィン
ヨシム・リヴネ
ウォルfgang・ウォルク

●ヴィオラ

ダニエル・ベニヤミニ
アリ・イスラエル
ミラム・ハーマン
マイラ・アーヴィング
マーラム・アーヴィング
アラム・ボースタイン
アミット・エリヤ
ガッド・エニュカール
ラフム・カム
シモン・コペンスキ
アブラム・レーヴェンタール
ツヴィ・リワカ
ナーム・ビンクック
アグリム・ロゼンブルット
マイル・ハラン
マルセル・ベルグマン
シュモット・ロレン
ヨラム・アルビン
ダヴィド・バルネア
ハーウル・ラスマーゲー¹
エルハナ・ブレグマン
ナオミ・エフ
ハルコ・グロス
シェイコブ・メンツ
ラファエル・モラグ
アラ・ヤムボスキー
●コンラーバス
デヴィ・クリング
ビーター・マルク
ツヴィ・ゾハル
ルード・アミル
ドーヴ・カッツ
ユリ・マゲン
ミハエル・ニツベルグ
シェヴィゲン・シャキ
ガブリエル・ヴォール
ドーヴ・ヤーリ
ユディト・リベル
クヨ・イウエ
●エアノ・ハープシコード
ルート・メンゼ

●フルート

クリ・ショハム
ヨシ・アレンヘルム
ペアラム・アヴィラム
ペツ・ヤアン
アラム・ボースタイン
セシオン・フェイドマン
アミット・エリヤ
ガッド・エニュカール
ラフム・カム
セルジオ・フェイドマン
●オーボエ
エアウト・トナー
ハム・ユヴァル
ヘルマン・オーベンスタイン
マーリル・グリーンベルグ
ヘルマン・オーベンスタイン
●クラリネット
リチャード・ヒルル
ヤコブ・バルネア
エリ・エバ
エリハナ・ブレグマン
ナオミ・エフ
ハルコ・グロス
ヤコブ・メンツ
エリ・エバ
●バス・クラリネット
イスラエル・ゾハル
モルデハイ・レフトマン
モルデハイ・レフトマン
ゼビ・ドマン
ウォルター・メロツ
レスリー・ラシンスキ
レスリー・ラシンスキ
●ティンパニ
ギデオン・スナイナー
アロン・ボール
モルデハイ・レフトマン
ゼビ・ドマン
アヤカル・ラニン
レスリー・ラシンスキ
レスリー・ラシンスキ
●バースン
モルデハイ・レフトマン
ゼビ・ドマン
ウォルター・メロツ
レスリー・ラシンスキ
レスリー・ラシンスキ
●コントラ・バースン
モリツ・スタイナー
●ライリーライアン
エリイ・ゲレン
●ステージ・マネージャー
ウツイ・シニルタ
●技術助手
ヤコブ・カウフマン

IPO 理事会：D. ベニヤミニ（会長）、E. ブレグマン、Y. ミショリ

事務局長：アビ・ソロモン

音楽監督補佐：シヨーネ・ロニー・リクリス

演奏家評議会：Y. パステルマーク（会長）、M. ブレーダー、E. エンゼ、Y. フィンシャー、E. トルナー、G. ヴォール

リューム・コザイ：ツヴィ・オロフスキー、アラム・メメード

スーパーバイザー：ライ・バルネア・●インスペクター：ツヴィ・セガール・会議議長：P. ブラスバーガー

監事：ヨハネ・ベン・ヤコブ・スポーツ・クルー：アブラム・マロン

会計係：ヤエル・ザガリ・●予約部：グルダ・ゾハル



The Israel Philharmonic Orchestra

MUSIC DIRECTOR : ZUBIN MEHTA

First Violins

Chaim Taub
concertmaster*
Uri Pianka
concertmaster*
Moshe Murvitz
ass't concertmaster
Menahem Breuer
ass't concertmaster
Izia Brakier
Marina Dorman
Raphael Frankel
Rodica Iosub
Zinovi Kaplan
Raphael Markus
Avraham Melamed
Robert Mozes
Ron Porath
Anna Rosovsky
Zvi Segal
Eva Strauss-Marko
Mordechai Youval
Paya Yussim
Matos Zalmanovich

Violas

Daniel Benyamini*
Arie Israeli*
Miriam Hartman**
Michael Appelman
Avraham Bernstein
Amihud Elroy
Gad Eshkar
Rachel Kam
Shimon Koplanski
Avraham Levental
Zvi Litwak
Naumim Pinchuk
Avraham Rozenblith

Flutes

Uri Shoham*
Yossi Arnhem**
Bezalel Aviram
Peretz Yaron
Sergio Feidman
Peretz Yaron
Sergio Feidman

Horns

Ya'acov Mishori*
Meir Rimon*○
Jeffrey Lang*

Cello

Michael Haran*
Marcel Bergman*

Double Bass

Shulamit Lorrain**
Yoram Alperin
David Barnea
Paul Blassberger
Elchanan Bregman
Naomi Enoch
Baruch Gross
Ya'acov Mense
Raphael Morag
Alia Yampolsky

English Horn

Merrill Greenberg

Oboe

Elihu Thorner*

Clarinet

Chain Jouval**
Richard Lesser*

Trombones

Kenneth Cox*

Tuba

Ilan Eshed**
Raphael Glaser
Yoram Levy

Bassoon

Merrill Greenberg

Timpani

Gideon Steiner*

Contra Bassoon

Shemuel Hershko*

Bass Clarinet

Israel Zohar

Bassoon

Teddy Kling*

Double Bass

Peter Marc*

Harp

Zvi Zohar**

Percussion

Alon Bor*

Harp

Gabi Hershkovich

Librarian:

Marilyn Steiner

Asst. Librarian:

Eli Geffen

Stage Manager:

Uzi Seltzer

Technical Asst.:

Yaakov Kaufman

IPO Management : D. Benyamini (Chm'n), E. Bregman, Y. Mishori

General Secretary : Avi Shoshani

Assistant to the Music Director : Shalom Ronyo-Riklis

Musicians' Council : Y. Pasternak (Chm'n), M. Breuer, E. Eban, Y. Fisher, E. Thorner, G. Vole

Review Committee : Zvi Ostrowsky, Avraham Melamed

Supervisor : Ray Parnes ● Inspector : Zvi Segal ● Assembly Chm'n : P. Blassberger

Comptroller : Yochanan Ben-Ja'cov ● Spokesman : Avraham Maron

Treasurer : Yael Zagouri ● Subscription Dept. : Varda Zohar



フーベルマンとトスカニーニ、1936年

1936年2月29日、ニューヨーク・タイムズに次のような短い記事が載った。

「トスカニーニ、パレスチナの新しいオーケストラを指揮。同氏は10月にテル・アヴィヴで行われるオープニング・コンサートへの招きを受けるにあたり、ナチに迫害されたアーチストのために闘うことは自らに課せられた義務であると語った。このニュースは優れたポーランド人ヴァイオリニストであり、イスラエル・フィルハーモニック・オーケストラの創設者であるブロニスラフ・フーベルマン氏を通じて報道関係に発表された」

ヨーロッパの行く手にある運命、特にユダヤ人の将来を感じたフーベルマンは、中央ヨーロッパ在住の優れた音楽家の何人かにパレスチナに移住するように呼びかけた。当時のパレスチナは人口約40万人の国であった。フーベルマンは、中東の、当時パレスチナと呼ばれていた地を音楽活動の中心地にしたいという夢を描いていたのである。フーベルマンはパレスチナに到着してすぐに、パレスチナ交響楽団の結成にあたったのである。

若き指揮者ウリアム・スタインバーグが選ばれ、ヨーロッパからの亡命者（難民）やもともとの在住者70名から成るオーケストラのリハーサルを行ううち、トスカニーニが同地にやって来た。

アルトゥーロ・トスカニーニがパレスチナを訪れ、1936年12月26日、その名指揮のもとで IPO の第1回演奏会が催された。イスラエル・フィルハーモニックの誕生であった。

その後、イエルサレム、テル・アヴィヴ、及びハイファの主要都市で演奏会が続けられ、そして IPO は第1回の国外公演としてパレスチナを出てエジプトを訪問した。フーベルマンのもうひとつの夢が実現したのである。こうした創立当初の活動以来 IPO は、戦争のさなかでも絶えることなく公演活動を続け、国内外合わせて年間200回を超えるコンサートを行っている。第2次世界大戦中、交通手段が軍関係のもののみに制限された時は、地元の指揮者とソリストでコンサートを行った。時には指揮者なしでさえ演奏会を開いたことさえあった。新しいオーケストラが“自らを指揮する”力を發揮したのである。

オーケストラの歴史の中では、忘れ得ぬ、予期せぬ出来事がいくつか起こっている。1948年5月15日、イスラエル国家が成立し、この歴史的な日、パレスチナはイスラエルとなつたのである。IPO は独立宣言式典に招かれて國歌を演奏することになったが、式典の会場が狭く、限られた人数しか会場に入ることができなかつた。ベン・グリオンが独立宣言書を読み上げる中で、IPO は別の部屋で國歌“ハティクヴァ”を演奏し、さらに寛くの人々が外の道路にあふれた。

また、1948年の独立戦争の間の短い休戦期間に、レナード・バーンスタインとオーケストラのメンバーは、包囲下のイエルサレムでのコンサートを予定通りに行おうと、テル・アヴィブから45マイルの道のりを、危険なビルマ街道を通り8時間かけてたどり着いたこともあった。

数日後、再びバーンスタインの指揮で、解放されたベエルシェバの町で兵士たちのため特別コンサートが実施された。

1948年とはうつて変わった穏やかな1959年、ユージン・オーマンディー指揮、アイザック・スターをヴァイオリニストに迎えて新しくできたエイラットの町で IPO の野外コンサートが行われた。

六日戦争の時には、指揮者ズビン・メータ、テノールのリチャード・タッカー、ダニエル・バレンボイムとチェリストのジャクリーン・デュ・プレらが他の仕事をキャンセルしてまで

も IPO の演奏会に参加し、イスラエルの人々との連帯を表明した。

IPO の客演指揮者やソリストを列記すると、そのまま「音楽界紳士録」ができるほどにまでなった。トスカニーニを迎えての第1回のコンサート以来、世界の著名指揮者が IPO と共に演している。まず、クーセヴィツキー、ミュンシュ、モントー、バルビローリ、ミトローブロスといった伝説的な名前に続いて、バーンスタイン、オーマンディー、ショルティ、ジュリーニ、マゼール、バレンボイム、そして当然ながら IPO の音楽監督ズビン・メータらが挙げられる。

ソリストを列举すると、フーベルマン、ハイフェッツ、ピアティゴルスキイ、ルーピンシュタイン、スター、ロストロボーヴィッヂに加えてイスラエル人であるバールマン、ズッカーマン、バレンボイムなどである。ビヴァリリー・シルズ、バガーロッティ、レオントン・プライスなどの優れた歌手も IPO の演奏会に華を添えた。永く客演アーチストの中にはイスラエル人指揮者、ソリストが多く含まれている。

IPO はイスラエルの上にしっかりと根を張り、努力を結集している。定期演奏会は、イエルサレム、テル・アヴィブ、ハイファだけでなく、キプロス、国立公園、及びケサリアの古代ローマの円形劇場跡などで行われている。ほとんどの演奏会にはイスラエル国防軍のメンバーが客として招待されている。

毎年の定期会員数は約35,000名、イスラエルの300万という人口を超える人口を持つ世界の大都市と比べても、大変に高い数字と言える。1981年の夏、メータとバールマンが顔を合わせた、テル・アヴィブのハヤルコン公演でのコンサートには20万人の聴衆が集まつた。また、青少年層の音楽鑑賞教育のために毎年音楽会シリーズを行うというユニークな活動も行っている。

オーケストラは、フレデリック・R・マン記念講堂を本拠としている。これは1957年に設立された3,000席の、音響効果のすばらしいホールで、その建設基金を出したF・R・マンにちなんで名をつけられたものである。

1969年にズビン・メータが音楽顧問となり、10年後には IPO とニューヨーク・フィルハーモニックの音楽監督に就任した。



ベツレヘムにおける野外コンサート

正規の楽団員数は110、うち15名が女性である。設立当初のころとは違い、現在の団員のほとんどがイスラエル生まれ、またはイスラエルで音楽教育を受けている。25名ほどがソビエトからの移住者で、アメリカ、アルゼンチン、その他の西欧諸国からも多数の移住者がいる。

最初の国際的公演旅行は1951年のアメリカ合衆国公演で、その後もヨーロッパ、南北アメリカ、オーストラリア、日本、インドなどの公演が続いている。鉄のカーテンの向こう側の国だけが未踏の地になっている。1966年にはソビエト公演が予定されていたが、間際になって「モスクワのホテル設備不足のため」中止となつた。

ザルツブルク、ルツェルン、エディンバラ、ベルリン、その他の音楽祭からの招きや、その他 IPO がよく訪れる都市から、各シーズン常に招待の要請が続いている。

イスラエル・フィルは自管理団体で、予算の60%は入場券売り上げでまかない、欠損の一部についてはイスラエル政府、アメリカ＝イスラエル文化財団やその他の民間寄附の援助を受けている。

イスラエルの著名人からなるパトリック・ボード（公共理事会）が一般の利益を代表し、またオーケストラ団員は、オーケストラの諸問題を扱う経営委員会やその他の役員を団員の中から選出することができる。

最近、イスラエル・フィルハーモニック・ファウンデーションという新しい財團が設立された。アバ・エバンを長とするこの財團は、オーケストラが国際的な高水準を保つのを助けることを目的としている。

ランサム・ウイルソン

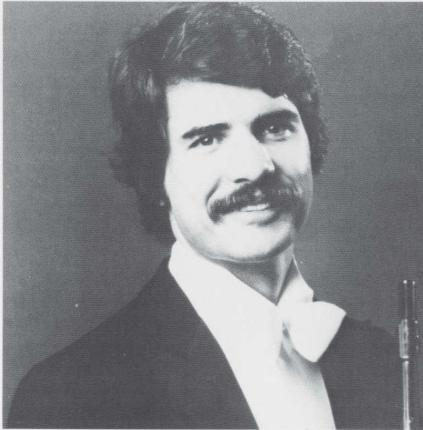
RANSOM WILSON

●フルート独奏(「ハリル」)

名匠ランサム・ウイルソンをニューヨーク・タイムズは“現代の、いや、すべての時代の最高のフルート奏者の一人”と評した。北カロライナ芸術学院とジュリアード音楽学院をへて、フルプライト留学生としてフランスのジャンピエール・ランバールに師事。

フルートの独奏者としてアメリカ合衆国で数々のコンサート出演をした。1984年秋にはアジア、イタリーでも演奏した。サンフランシスコ・オーケストラやレナード・バーンスタインのイスラエル・フィルほか欧米の一流室内楽団などに定期的に客演している。最近ではリンカーン・センターでの“モストリー・モーツアルト・フェスティバル”に客演した。

旺盛な演奏活動やレコード録音のほかに、指揮者としての才能も高く評価されている。1981年にはプロの室内楽団であるソリスト・ニューヨークを設立し、ニューヨークで定期公演す



14

ハイム・タウブ

CHAIM TAUB

(コンサート・マスター)

●第1ヴァイオリン



1969年からIPOのコンサートマスターであるハイム・タウブは1959年に入団した。出身地はテル・アヴィブ。ここでオルドエン・パルトスに師事、その後合衆国ではガラミアンに師事した。10年前まではビットバーグ・シンフォニーのソリストであった。

イスラエル中のオーケストラはもちろんのこと、多くの海外公演にソリストとして客演している。テル・アヴィブ弦楽四重奏団の創立メンバー。

ウリ・ピアンカ

URI PIANKA

(コンサート・マスター)

●第1ヴァイオリン



1969年よりコンサートマスターをつとめる。IPOには1959年入団。イスラエル出身。イスラエルで音楽を学んだ後、ニューヨークに渡り、ガラミアンとドロシー・デレイに師事した。ジュリアード音楽賞とベルギーのエリザベート・コンクールで優勝している。アメリカのブランディス大学で教えたこともある。

イスラエルの主なオーケストラは勿論、海外の演奏会にもソリストとして出演している。ユバールトリオの創立メンバーでもある。

エリヤクム・ザルツマン

ELYAKUM ZALTSMAN

●第2ヴァイオリン



1975年に入団。1980年より第2ヴァイオリンの副首席奏者となる。

1947年ヴィルナに生まれ、ヴィルナ音楽学院で学び、ヴィルナ・フィルのソリストであった。1974年イスラエルに移住、IPOのソリストになった。

ラザール・シュステル

LAZAR SHUSTER

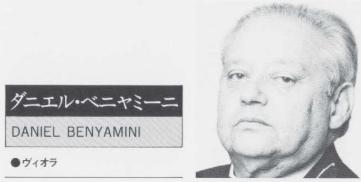
●第2ヴァイオリン



1975年入団、1981年に第2ヴァイオリンの副首席奏者となる。出身地のルーマニアではモスクワのヤンケルビッヂ教授に師事。モスクワ室内歌劇場のコンサートマスターをつとめた。

1975年にイスラエルに移住。テル・アヴィブ・ルビン音楽院でアンドレベスキ教授に師事した。

テル・アヴィブ四重奏団のメンバー。IPOはじめ多くのイスラエルのオーケストラでソリストとして活躍している。

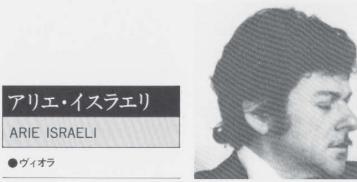


ダニエル・ベニヤミニー

DANIEL BENYAMINI

●ヴィオラ

1950年入団、1960年より首席ヴィオラ奏者と管理委員長を兼任する。テル・アヴィブ出身、イスラエルで音楽教育を受けた。1977年から1年間パリ管弦楽団の首席ヴィオラ奏者であった。ソリストとして、この楽団そして IPOとともに多くの録音にたずさわってきた。イスラエル五重奏団の創立メンバー。



アリエ・イスラエリ

ARIE ISRAELI

●ヴィオラ

1944年に入団、1956年から首席ヴィオラ奏者。イスラエルではボロショフ、スタイルグリツ、ブランバーグ、ベルグマン、合衆国ではブリムローズに師事した。モンテカルロ、パレルモのテアトロ・マッシモ、ローマのサンタ・チチリアはかフランコ・フェラーラのオーケストラなど数多くのオーケストラでソリストとして活躍してきた。IPOだけでなくイスラエルの一流楽団にも客演し、演奏会や室内楽団のリサイタルなどでも活発な演奏活動を続けている。



マイケル・ハラン

MICHAEL HARAN

●チェロ

首席チェロ奏者。1976年入団。エルサレムに生まれ地元の音楽学院卒業後はパリでナヴァラに師事、アメリカ合衆国でローズとグリーンハウスに師事した。IPOはもとより、イスラエルの内外で広く活躍、數々の国際的賞を獲得している。指揮に当たることもあり、室内楽シリーズの制作・編集もこなしている。

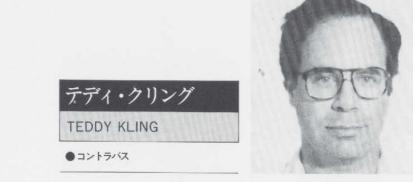


マルセル・ベルグマン

MARCEL BERGMAN

●チェロ

首席チェロ奏者。1978年入団。ソ連に生まれ、レニングラード音楽学院を卒業、同学院で教えた。1978年にイスラエルに移住、IPOほかイスラエルの楽団に出演。イスラエル・ピアノ・トリオのメンバーでもある。



teddy・クリング

TEDDY KLING

●コンtrapas

1970年入団、1979年に首席バースーン奏者に昇格。テル・アヴィブ出身、イスラエルで音楽教育を受けた。IPOの一員としてズービン・メータの下、ソリストとして活躍、室内楽団やジャズのグループとの共演もさかんに行っている。



ピーター・マルク

PETER MARCK

●コンtrapas

1976年入団、1978年に首席バースーン奏者になる。米国出身、トム・モナハンとフランコ・ペトラッキに師事した。イスラエルには1976年に移住。フィルハーモニック七重奏団と“不思議な楽器の歌”(ベース、チューバ、ピアノ)のメンバーであり、イスラエル・ピアノ五重奏団のゲストでもある。



ユディット・リベル

JUDITH LIBER

●ハープ

ユディット・リベルは IPO をはじめ多くのイスラエルのオーケストラでハープのソリストとして活躍している。1983年にはニューヨーク・フィルの全米総断ツアーに客演している。

アメリカ合衆国出身、イスラエルでは1963年に移住。合衆国ではオバーリン音楽学院とイリノイ大学、オーストリアではザルツブルグ・モーヴァルティウムで学び、ルーシー・ルイス、アリス・シャリファード、カルロス・ナルセド等の名奏者の指導を受けた。

リサイタルや室内楽団、レコード録音なども活発に行っている。イスラエル・ハープ協会の副会長で、イスラエル国際ハープ・コンテストでは審査員をつとめている。ルビン音楽院とテルマ・イェーリン芸術高校で後輩の指導に当たっている。



ウリ・ショハム

URI SHOHAM

●フルート

IPO の第1フルート奏者であるウリ・ショハムは1951年からこのメンバーである。1931年、ベンジャミンに生まれ、テル・アヴィブとエルサレムの音楽院で音楽教育を受けた。

ユリ・テプリツにフルートを学び、後にパリでジョン・ピエール・ランバールと、そしてスイスではアンдре・ジョネネットに学んだ。17才の時、ラジオ管弦楽団(コル・イスラエル)のフルートの第一人者になった。彼は、IPO、エルサレム交響楽団にソリストとして出演した。またイスラエル・木管五重奏団ほかいくつかの室内合奏団のメンバーでもある。

1981年、バチカンの作曲家により指揮されたバーンスタインの「ハリル」では、ソリストであった。ウリ・ショハムはテル・アヴィブのルビン音楽院の教師でもある。

エリアウ・トルナー
ELIAHU THORNER

●オーボエ



長年 IPO の首席オーボエ奏者として活躍、IPO はもちろんイスラエル放送楽団でソリストとして演奏を続けてている。イスラエル木管五重奏団のメンバーでもあり、イタリアのスボレトで開催された有名な「二世界のフェスティバル」に出演して、イスラエル作曲家エドエン・パルトスの木管五重奏を演奏した。

加えてイスラエル放送局のために多くの室内音楽番組も録音してしている。テル・アヴィブのルビン音楽院の教師でもある。

出身はドイツでイスラエルとアメリカ合衆国で音楽を学んだ。1946年までイスラエル放送交響楽団のメンバーで、その後 IPO に入団。

リチャード・レスラー
RICHARD LESSER

●クラリネット



1966年入団、1968年に首席クラリネット奏者になった。合衆国ワシントン D.C. 出身、ロサンゼルスでカルマン・ブロックとミッチャエル・ルリーに師事、フィラデルフィアの卒業校であるカーネギー音楽学院ではアントニー・ジリッティに師事した。四年連続夏のマールホロ音楽フェスティバルのメンバーをつとめ、この有名なフェスティバルに関連した LP 録音に加わっている。イスラエルに来る前はイーゴル・ストラヴィン斯基の指揮するコロンビア・シンフォニー・オーケストラの首席クラリネット奏者であった。テル・アヴィブのルビン音楽院の教師もつとめ、イスラエル木管五重奏団の一員でもある。

モルデハイ・レフツマン
MORDECHAI RECHTMAN

●バースン



1946年より IPO の首席バスーン奏者をつとめ、ソリストとしてイスラエル内外で演奏してきた。スボレト、マールボロ、カサルス、バングなどのフェスティバルでもソリストとして出演。イスラエル木管五重奏団とイスラエル・フィルハーモニック木管アンサンブルの創始者であり音楽監督である。モントリオールの「グループ・コンセルタンテ」の音楽監督でもある。

木管楽器の編曲家そして指揮者として国際的な定評がある。インディアナ大学の教授に立ったこともあるが、現在はテル・アヴィブのルビン音楽院はじめ世界各地のマスター・クラスを教えている。

ヤアコブ・ミショリ
YA'ACOV MISHORI

●ホルン



首席ホルン奏者であると同時に IPO の役員でもある。テル・アヴィブ出身、同地とオランダで学んだ。ソリストとして青少年オーケストラ、ザハール・オーケストラ、ラジオ交響楽団などをへて IPO には1965年入団した。オランダ留学中(1962)はコンセルトヘボウのゲスト奏者であった。IPO の国内、国外の活動にソリストとして参加のかたわら、フィルハーモニック金管五重奏団と「ハトール・イム」トリオのメンバーでもある。音楽に関する随筆や評論も国内外でさかんに行っている。

メイル・リモン
MEIR RIMON

●ホルン



メイル・リモンは、IPO フレンチホーンの副首席奏者であり、スピービン・メータ、ポール・バレー、ダニエル・ノレンボエムなどの指揮による IPO のソリストの出演もしている。また、彼はイスラエルを訪れるヨーロッパ、アメリカなどのオーケストラにもソリストとして出演している。彼はイスラエル木管クインテットのメンバーであり、また、フィルハーモニック・アンサンブルのコーディネーターでもある。国際ホルン協会で教え演奏しているが、1981年副会長にも選ばれた。1981年イスラエル外務省の後援でアメリカ旅行を行った。

メイル・リモンは1946年ビルバオで生まれ、1957年イスラエルに定住した。彼はガドナ・オーケストラ、イスラエル・ラジオ・オーケストラ、ホルン室内オーケストラで仕事をしたあとアメリカ・イスラエル文化基金の援助で留学した。1970年にイスラエルに戻り IPO に加わった。

ケネット・コックス
KENNETH COX

●トランペット



1955年合衆国に生まれる。クリーブランド・オーケストラのバーナード・アベル斯坦に師事、インディアナ大学の音楽科を1978年に卒業した。1980年にはイエルサレム交響楽団の首席トランペット奏者になり、1984年には IPO の首席トランペット奏者になった。室内楽の方面でも積極的にイスラエルの多くの楽団に客演している。

ジェフリー・ラング
JEFFREY LANG

●ホルン



ニュージャージー出身、1982年にジュリアード音楽学院を卒業、ニューヨーク・フィルの海外演奏旅行に加わり各地をまわるとともにニュージャージーのアヴェリー・フィッシャー・ホールでも演奏した。メトロポリタン・オペラ、スボレトやウォーターラーのフェスティバルでも演奏している。現在 IPO の副首席ホルン奏者としての仕事の他に、ABC テレビやニューヨークのフリーの演奏活動に忙しい。

ライ・パルネス
RAY PARNES

●首席トロンボーン



IPO のトロンボーン首席奏者であるライ・パルネスも、ソリストとして演奏する。

彼はアメリカ・ケンタッキーの生まれで、ルイスビル大学の音楽課程を卒業し、1953年に高名なタンブルウッドセミナーに出席している。

その後2年をおいてアメリカへ戻り、ルイスビルと後にはビッグ・バーグ・オーケストラでトロンボーン首席奏者として参加した。1958年イスラエルに戻り、それ以後 IPO と共に活動している。彼はまた、他のイスラエルのオーケストラにソリストとして参加し、現在イスラエル・フィルハーモニック・プラスクインテットとハトール・イムトリオの両方のメンバーでもある。

パルネスはまた、テル・アヴィブのルビン音楽院で教えている。



スチュワート・テイラー
STEWART TAYLOR
●トロンボーン



1983年5月よりIPOの副首席トロンボーン奏者である。同團以前の彼はモントリオール・シンフォニー（1975～1983）とニュージャージー・シンフォニー（1971～1975）に在籍していた。ほかにニューヨーク・フィル、メトロポリタン・オペラ、ニューヨーク・シティ・オペラ、そして数多くの室内楽團で演奏してきた。

1984年よりテル・アヴィブ大、ルビン音楽院で教えているが、1978年から5年間トロントのマッギル大学でも教職に在った。

シェムエル・ヘルシュコ
SHMUEL HERSHKO
●チューバ



首席チューバ奏者。イスラエル出身。アメリカン・イスラエル文化基金の奨学生として合衆国で学び、有名なチューバ奏者ロジャー・ボボに師事した。

ヘルシュコは1978年にIPOに入団、同團での活動に加えて、フィルハーモニック・プラス・クインティットや彼自身が創立メンバーである“不思議な楽器の歌”樂團で（コントラバス、チューバ、ピアノ）も演奏している。チューバやピアノのリサイタルには頻繁に出演している。

ギデオン・スタイナー
GIDEON STEINER
●ティンパニ



首席ティンパニ奏者。1939年イスラエルに生まれる。バーカションとティンパニーをイスラエル、ヨーロッパ、アメリカで学ぶ。1960年にIPOに入団し、数多くの現代音樂の世界初演で演奏してきた。彼のために造られた曲もいくつかある。ルビン音楽院のバーカション部の主任教授でもある。

アロン・ボール
ALON BOR
●バーカション



1952年イスラエルに生まれ、バーカションをイスラエルとアメリカで学ぶ。1970年にIPOに入団。バーカション・セクションの首席とティンパニー・セクションの副首席をつとめる。ルビン音楽院のバーカション部の主任教授でもある。

■グスタフ・マーラー（1860～1911） 交響曲第9番ニ番目



マーラーは“1900年”という魔術的日付変更線をまたいで聳え立つ巨人というイメージを喚起する。心臓に直結する左足は確固としてあの豊かな愛すべき19世紀を踏みしめ、右足は幾分ふらつきながらも20世紀の確かな足場を求めていている」とはL.バーンスタインの語った言葉である。極めて意味深長な名言である。確かにここにはバーンスタインのマーラー評価がある。19世紀に重きを置くのは今日の常識的解釈であるが、20世紀に踏み込んだ右脚がふらついているのか既にしっかりと踏みしめているのか、判断は個々の価値観や観点の相違により異なってくるだろう。また、いわゆる“20世紀音樂”的開花期をどの時点にとるかによっては、1911年に世を去ったマーラーをどの程度まで“20世紀音樂”の中で扱うかという意地悪い疑問を呈する人がいることは間違いない。しかし、この問題は個性に関する問題である。例えばマーラーより13年遅く生まれ、今世紀半ばまで活躍したラフマニノフ（1873～1943）は完全に19世紀タイプの音樂家であったし、一方同世代のシェーンベルク（1874～1951）は言うまでもなく今世紀の最も重要な音樂家である。極端な比較例であるが、作曲家がどの時代に生まれ、いつ活躍したかということより、その個性、否、意識の面から見た場合にバーンスタインの語った「20世紀をまたぐ巨人」という言葉は卓見と言わざるを得ない。

マーラーの音樂には親しみやすく美しい旋律が少なくない。が、一方で過剰な悲傷性ややりきれない絶望感に満ちた瞬間があるのも事実である。そうした箇所は如何に演奏解釈を究めようとも、さらに絶望感が深まるだけである。しかしバーンスタインは言う。“全曲が終った瞬間に我々は浄化される。疲労困憊せず、また浄化されることなく『交響曲第9番』を聴き終えるということは、少なくとも感受性をもつ人ならあり得ない”。

マーラーが「第9番」という番号をかなり認識していたことは衆知のおりである。ベートーヴェンの最後の交響曲となった数であり、またもっと身近に知っていたブレックナーが未完のまま死の数時間前まで書き続けていたのが「第9番」であつ

た。10数人の兄弟の大半を幼児期に失ない、すぐ下の弟は盲目と心臓病で13歳の時に死、音楽家を志した別の弟は22歳でピストル自殺をするというように身内の死を目のあたりにしてきたのである。そして、ついに愛娘マリー・アンナを1907年7月5日に病死させているのである。かねてから自分の健康もすぐれず、しばしば医者通いをしていた彼であったが、溺愛していた5歳の娘を亡くした数日後、彼自身が心臓発作で倒れ、医師の診断により「先天性、両側性代償性心臓弁膜症」の宣告を受けたのであった。少年期から人の死を身近に見続けてきた彼は、モーツアルトのように死を人生の最終目的とか最高の友と考えることはできなかつた。死に対する恐怖は病的なまで強められていたのである。そうした彼であるからこそ、「第9番」の交響曲を書くことは人生との告別を意味するような強迫観念にとらわれたのであった。その結果、「第8番＜千人の交響曲＞」の次に完成させた二人の独唱者を伴う大管弦楽のための交響曲を番号のつかない「大地の歌」として仕立てたのであった。

結果的には「第9番」の番号を採用してこの作品を書くことになるのだが、その時に彼が現世との訣別を全く考へなかつたとは言えない。むしろ先天的な心臓病のあることを既に知った彼であるから、現世への諦観を少なからず感じていたと考えるほうが自然かも知れない。事実「第9」を完成させ、10番目の交響曲を書き始めてその完成を待たずに彼は世を去つたのであった。

永年務めたウィーン宮廷歌劇場指揮者を辞任し多くの人々に惜しまれながら彼は1907年12月9日にウィーンを去ったのである。1908年1月1日には早くも新しい活躍の地となるアメリカでメトロポリタン歌劇場の指揮台に立ちヴァーグナーの楽劇「トリスタンとイゾルデ」を上演している。演奏活動の中心はニューヨークで移ったことは言え、大西洋を何度も往復し、ヨーロッパでの演奏と創作も続いている。1908年の夏には「大地の歌」が完成されている。1909年春シーズンでメトロポリタンとの契約切れ、夏にはアムステルダムでの演奏会を開いたのちドロミーテン山地のアルト・シェルダーベックで「第9」に着手し、一気に書き続けている。この作曲が充実していたことは、作曲中の8月下旬にしばしこそを訪づけたR. シュトラウスに宛てた9月末の手紙にも窺える。10月に戻ったニューヨークで



マーラーのかリカチュア

「室内交響曲」(1906年)の書法を感じさせ、後のベルクやヴェーベルンの作品の構成を先取りするとも評されるこの楽章は、45小節からなる。

第2楽章 気楽なレンドラーのテンポで、やや武骨に、そして非常にたくましく(ドイツ語表記)ハ長調 4拍子。前楽章の内容と著しいコントラストをなすこの楽章はマーラーの親しみやすい音楽を聴かせる。レンドラーの形をとったスケルツォ楽章と言えよう。しかし、マーラーのレンドラーは単純朴納なブリックナーのそれとは異なり、ここでも独自な巧妙なテンボ上の構成がとられている。ややテンボを上げるホ長調部(第IIテンボ)はワルツの趣をもつ。このあと第Iテンボ、第IIテンボの部分が繋ぎ、第IIIテンボではよりゆっくりとしたレンドラーに戻される。さらに何度もテンボを変えていく621小節のスケルツォを構成してゆく。

第3楽章 ロンド・ブルースケ アレグロ・アッサイ、極めて反対的に(ドイツ語表記)イ短調 4拍子。

激しい情熱に満ちたこの楽章は極めて多くの楽想が見事なボリューフニーの中に織り込まれて現われる。構成や素材面で彼の「第1」「第3」「第5」交響曲からの引用などを指摘することもあるが、それでも多くの楽想は後の生涯を振り返っているような印象を受ける。タイトルの「ブルースケ」は「道化芝居」を意味するものであり、マーラーが自己的生涯をカリカチュアライズしたものと言えよう。667小節。

第4楽章 アーダージョ 変ニ長調 4拍子。「大地の歌」の最終樂章(告別)と密接な関連をもっていた第1楽章に対し、この終樂章は完全に「現世との訣別」を想させる。第1楽章下降動機から発展した主題の末尾には「子供の死の歌(亡き子を偲ぶ歌)」第4曲の「私(は)ふと思うの、子供たちはちょっと出掛けただけなのだと」からの引用が用いられている。

透徹した響をもつ弦楽合奏を主体にして、和声法と対位法技術を見事に融合させた美しい響の中での冒頭11小節で呈示された主題が12回に亘る最も独自の性格をもって変奏されてゆく。マーラーの全作品中における最大の傑作とされるこのアーダージョで曲は閉じられる。「息が絶えるように」とされた変ニ長調主音が *p p* のフェルマータで消え入るのは第185小節。

ほぼ完成せている。ブルーノ・ヴァルターとの手紙のやりとりから、冬のうちにスコアを最終的に仕上げる予定であったことがわかるが、結局スコアが仕上がったのは1910年4月1日直前であったことがヴァルターへの手紙で報告されている。

初演は遅れて、生前にマーラーは自作を聴くことはできなかっただ。初演の指揮者は既にマーラーの死後「大地の歌」をミュンヒエンで初演(1911年11月20日)していたブルーノ・ヴァルターにより、1912年6月26日にウィーンで行なわれた。

完成された最後の交響曲となったこの作品でマーラーは再び4楽章構成に立ち戻り、また声楽を排して伝統的な交響曲の形式を採用している。技法・語法の問題を棚上げにして概観するならば、第1楽章はソナタ形式、第2楽章はスケルツォ、第3楽章はロンドそして第4楽章はアーダージョで独自の変奏形式を用いている。樂章配列の上から見れば、第1楽章がアンダンテ・コン・モートであり、緩一急一緩のシメントリーをしている。

第1楽章 アンダンテ・コン・モート ニ長調 4拍子。チエロが、次いでホルンが低音域に静かに属音を奏すると、しっかりと足どりでハープが後の展開で重要な役割を果たす音形(短3度と長2度進行)を示す。これをホルンがもうひとつ重要な音形(完全4度と完全5度)で引き継いで始まる。下降する長2度動機は樂章全体を支撑する最も重要な素材で、遠くベートーヴェンの「告別ソナタ」(Op.81a)のモットーを意識の底に潜在させている。友人シェーンベルクの無調時代の「第

■レナード・バーンスタイン (1918年8月25日生れ)

「ハリル」ソロ・フルート、弦楽アンサンブル、打楽器のためのノクターン

平和主義者バーンスタインのこのところの反核・反戦をスローガンにした活動は、ついひと月ほど前に「広島平和コンサート」で象徴的に示されたとおりであるが、こうした彼の姿勢はいまに始まったわけではない。それは彼の多くの宗教的作品ないし信仰の危機をあつかった作品に早くから窺われたものである。

ペライ語でフルートを意味する「ハリルHALIL」をタイトルとしてもつこの作品も、平和を希求した音楽である。完成されたのは1981年で、その年の5月23日にエルサレムで演奏され、4日後の5月27日にはテル・アヴィヴのフレデリック・マン・ホールで公開の世界初演がなされている。作曲者の自身の指揮でテル・ランバルを独奏者に招いてイマラール・フィルによる初演であった。アメリカでも同年7月4日にタンブルウッドで作曲者の指揮によるボストン交響楽団により演奏されている。

15歳ほどのこの作品は若くして死んだひとりの芸術家の思いでるために書かれたものである。その芸術家は非常に才能に恵まれたイスラエルのフルーティスト、ヤディン・タネンバウムであった。ヤディンは1973年、19才のときにはシナイの戦闘に従軍して、戦車の中で命を奪われたのであった。平和のために若い命をささげたヤディンの運命に感銘してバーンスタインは筆をとったのである。

バーンスタインの管弦楽曲は規模の大小に拘らず、どの作品においても彼の思考テーマに合った表現形態を生み出している。そのテーマは作品の出発点に過ぎないのであって、純粹に音楽的な観点から作品は理解されねばならないが、そのテーマが作品の構成自体に力を及ぼしていることも確かである。「ハリル」に寄せたバーンスタイン自身の言葉を記しておこう。

「ハリル」は形式的には私がこれまで書いてきたどの作品とも似ていない。しかし、その調性的の力と非調性的の力との間の闘争という点においては私の音楽の多くと共通したものをもっている。この曲の場合、私はその闘争を戦争及び戦争の恐怖、

生への強い願望、芸術と愛の慰め、そして平和への希望といったものを内包するものとして感じている」と述べている。

開始部の12音列から全音階的な最後のカデンツァに至るまでノクターン的イメージでの葛藤が接続的に展開されてゆく。その葛藤は「叶ってほしい夢、悪夢、急速、眠むられぬ夜、夜の恐怖、そして死と双子の兄弟のように隣り合わせの眠りそのもの」を描いてゆくのである。

最後にバーンスタインは言う、「私はヤディン・タネンバウムに会ったことはない。しかし、私は彼の魂を知っている」と。作品は「ヤディンとその倒れる同朋の魂に」獻呈されている。(HALILは、日本語では「ハリル」と表記しているが、HAは通常の「ハ」よりも強く発音する)

■レナード・バーンスタイン

「ウェストサイド物語」より「シンフォニック・ダンス」

作曲家バーンスタイン像が今日なお明確に打ち立てられているとは言い難い。指揮者、ピアニスト、啓蒙家といった多彩な活動が作曲家としての彼の姿を隠してしまっているとも言える。1935年の『詩篇148番』を作曲家としての公式な第1作と見るならば、彼の創作は今年でちょうど半世紀間に及ぶことになる。3つの交響曲(第1番「エレミア」1942年、第2番「不安の時代」1949年、第3番「ゲディッシュ」1963年)が、いわゆるクラシック・ファンには良く知られた代表作であることに相違はないが、これまでに公にされた約80曲に達する彼の作品の全貌をこれだけで評価するわけにはゆかない。そうした中で、彼がアメリカの否、世界のミュージカル史の流れを一新させる画期的作品を生み出してきたことは既に認められたことである。

《オン・ザ・タウン》1944年、《ワングブル・タウン》1952年、《キャンディード》(コミック・オペレッタ)1950年、《ウェストサイド物語》1957年の4つの作品が今世紀半のミュージカル史に果した貢献の大きさには測りしれないものがある。確かに彼は、ミサ「1972年、*ベンシルヴァニア街1600番地*」1976年の2作を加えて既にミュージカルは全6作ということで、作品数からすれば多作家のR.ロジャースやC.ポーター等に及ばない。しかし、1960年代に入ってきたのJ.ボックの《屋

根の上のヴァイオリン弾き)、M. リーの〈ラ・マンチャの男〉、さらには70年代のA. ロイド・ウェバーの〈ジーザス・クリスト・スーパースター〉等の誕生は〈ウェストサイド物語〉の存在なしには考えられないものである。

1957年9月26日初演以来ブロードウェイで爆発的にヒットをとげてから、4半世紀以上にわたって人気を保ち続いている〈ウェストサイド物語〉のストーリーは今更紹介するまでもないだろう。シェークスピアの原作「ロメオとジュリエット」を現代アメリカ社会のかかえる種々の問題、都会というジャンルにおける貧困と人種差別と非行と暴力、さらには大人と青少年の断絶、相互理解の欠如といった社会問題を底流に、対立し合う恋愛運命の首領と相手方の首領との間における恋愛悲劇に翻案したものである。

重要なのは、ストーリーよりも音楽それ自体にある。バーンスタインが〈オン・ザ・タウン〉以降追及してきたものがこの作品で見事な結晶を結んでいる。ひとと言でいえば、それはヨーロッパの伝統的芸術音楽、とりわけオペラと、アメリカの伝統的なミュージカルとの融合であった。複雑なヴォーカル・アンサンブル、いかにもライトモチーフ技術の採用、そして、とりわけ窓を貫く交響的展開と、西洋音楽史の中での「音楽における悪魔」とまで呼ばれる最も危険な音程である3全音(増4度)がトニーとマイアの不安定な関係あるいはジェッップ派とシャークス派の危険な対立や残虐さを象徴する重要な要素として用いるなどはヨーロッパ音楽の影響と見ることができるし、一方、リズムや音色におけるジャズ音楽語法にアメリカの伝統が生きているのである。

〈シンフォニック・ダンス〉はシッド・レイミンとアーウィン・コスターの協力を得て1960年に編曲したものである。全篇中から舞踏場面の音楽を中心とした9曲からなる一種の組曲として編まれている。

1. プロローグ：アレグロ・モデラート 2つの不真少年グループ、ジェッップとシャークスの対戦感の高まり。

2. 「どこかに」：アーダージョ 2つのグループが手をとつて一緒に過ごせる日がいつかやってくるという空想にふける少女のダンス・シーン。



レナード・バーンスタイン

3. スケルツオ：ヴィヴィアーチェ・レッジエーロ 「トニーとマリア」が何処かに自由な土地がある、と歌う場面に続き、少年たちが街の壁を突き抜け広々とした新鮮な空気と太陽のふり注ぐ世界を見い出す。
4. マンボ：プレスト 再び現実に戻り、グループの対立。
5. チャ・チャ：アンダンティーノ・コン・グラヴィア 星回りの悪い恋人たちが一緒に踊る。
6. 「出会いの場面」メーノ・モッソ トニーとマリアの最初の言葉を音楽が飾り立ててる。
7. 「クール」フーガ・アレグレット ジェッツは敵対意識を捨てる。
8. 「乱闘」モルト・アレグロ 両グループのリーダー、ペルナルドとリクの死を招く決闘場面。攻撃のクライマックス。
9. フィナーレ アーダージョ 愛の音楽が展開され、儀式の行列の曲となる。悲劇的現実の中に「どこかに」の架空の樂園的状況を想い起す。

■ヨハネス・ブラームス (1833~97)

交響曲第1番 ハ短調 作品68

ハイドンやモーツアルトを中心とした古典派の作曲家たちが完成させていった交響曲の歴史の上にベートーヴェンの9曲が果した革命的な変化は、彼以後の作曲家にもはや古典様式に基づく交響曲創作を断念せざるを得ないほどの絶対的な存在となるに思われた。ベートーヴェンの9曲は質的に音楽内容的に超越する作品を生むことは不可能に近いという観念を抱かせたのである。交響曲が古典様式とは表記を新たにして再び隆盛を見るの19世紀後半になってからであった。後期ロマン派の色彩を濃く盛り込んだり、民族主義的内容をもたせたり、あるいは文学的内容を重視して、オーケストラの編成を超大化させるという方法で個性的表現を追及していたドヴィルザーク、チャイコフスキイ、ブルックナー、そしてマーラーといった人々が新しい表現を試みた交響曲スタイルを再建していく。

こうした19世紀後半の流れの中にあって、ベートーヴェンの様式に果敢に挑戦して大きな成功を収めたのがブラームスであった。しかし、ブラームスにとってもその挑戦は手易いことではなかった。「第1交響曲」の創作は起草から脱稿まで20年以上を要したのである。22才のときに筆が進められたわけではない。最初の交響曲の構想は「ピアノ協奏曲第1番」にとって代わられている。しかし、29才の時には「第1楽章」の草稿を完成させていた。その後、多くの室内楽や管弦楽作品で確実な作曲技法を身につけたブラームスは41才頃になって再び本格的な交響曲創作に情熱を傾けるようになったのである。そして1876年9月(43才)のときに、当時の名指揮者ハンス・フォン・ビュローをして、「ベートーヴェンの不滅の9曲に次ぐ第10番」の誕生と言わしめたこの作品を完成させたのである。

第1楽章 ウン・ボコ・ソステヌーレ・ハ短調 %拍子。全オーケストラの強奏による悲劇的緊張感をたたえた長大な序奏部はその緻密な構成の中に全曲を統一する基礎動機をも示する。アレグロの主部は半音階的に上昇する鋭い木管音形に始まり、弦楽部が第1主題を呈示する。第2主題はファゴットやクラリ



散歩の途中のブラームスと乞食
Berlin 1850
Eduard Richter



ヨハネス・ブラームス

「ウェストサイド・ストーリー」は20年以上もまえに、映画を見て感動し、しばらくしてアメリカの役者をmajesticな舞台を見てこれも大いに楽しんだ。もちろん抜粋のレコードも聞いて、バーンスタインの作曲家としての力量を感じ入ったものだった。

それでこんどボリュールから出た作曲者の指揮による初の全曲盤（ドビュ・グラモフォン43MG0859-60）も楽しみにして耳をあてた。そしてこれはミュージカルの稀代の傑作であることを改めて強く確認したのだった。ひとくちにいえば舞台なしに、つまり音楽そのものとして聞いていられるということである。音楽としてひとり立ちできる内容を備えた作品ということである。ミュージカルについて私はいっこうに明るくないのだが、これは例外に属することではないだろうか。

キリ・テ・カナワ、ホセ・カラースを勤員した演奏としての出来ばえもあることながら、この2枚組を通して最も惹かれたのは、いくつかのダイナミックなダンス・ナンバーで、そこには大胆で新鮮な刺激が充満している。生き生きとした自発性と内発性が息づいていて、どれも魅力ある表現を届け、耳を捉えて離さない。しかもドラマのシチュエーションと人物の心理にびたり照応しているのも見事なものといえよう。映画やステージの記憶のせいもあるう、聞くうちにあれこれのシーンが見えるようで、バーンスタインの卓抜な劇場感覚を思い知らされたのである。

これらダンス・ナンバーの核をなしているのは動きの感覚ではないかと思う。ここでバーンスタインの音楽は実によく動いているのである。音楽は鳴って動くものだが、私がいるのはそのことではなく、もっと音楽表現の根本の問題であるのはいうまでもない。「ウェストサイド・ストーリー」の作曲の筆を運ぶバーンスタインの内面には生き生きとして、それこそダイナミックなものが突き上げるように躍動していたはずである。自分の内なる深部から湧き上り、噴き上げるように出来たのではないとか聞こえるのである。このレコード・ジャケットには作曲を控えたころのバーンスタインの日記が抄録されているが、1955年4月のある日のつりに、脚本家アーサー・ロレンツと打合せをしているうちに「……突然、すべてが生き生きとして来た。リズムと躍動が聞こえるようだ……」と書いている。

この予感はそのまま実現されたというのが私の実感である。かくして「ウェストサイド・ストーリー」は「ロメオとジュリエット」を下敷きしながらも、現代的で、ヴィヴィッドな若者の風俗を活写することに成功したのである。

こうした活力あふれるナンバーのいっぽう、柔い抒情的な音楽でもバーンスタインは魅力的である。トニーとマリアの「出会いの場面」のチャチャなど、ぞくぞくするほどチャーミングなときめきが感じられるし、つづく「マリア」、さらには「トゥナイト」の魅力は誰もが御存知だろう。「アイ・フィール・ブリティ」も浮きうきした喜びが脈打っている。

以上のすべてを通して「ウェストサイド・ストーリー」が誰の音楽を思い出すことがないのは立派である。つまりこれはバーンスタイン独自の音楽なのである。これだけわかりやすく、しかも俗に落ち着いた音楽を書いた指揮者（これまでばかりバーンスタインの表芸だらうから）は極めて珍しいといわなければならない。ついでにいえばバーンスタインはよく知られる3つの交響曲、ミュージカル「キャンドィード」のほかにもたくさん作品があるて、優に一人まえの作曲家というに足りる。これだけ解釈（指揮）と創出（作曲）の両面にすぐれた手腕を發揮した音楽家は現代にあっては例外中の例外とすべきだと思う。ペーパーもカランも作曲という点では零である。

このへんでの解釈のほうにも少し触れておこう。最近、私が聞いた指揮者のバーンスタインはモーツアルトの交響曲・第40番（28MG0769 第39番も入っている）、ハイドンの第92番「オックスフォード」（28MG0770 「V.半」も聞ける）、それとストラヴィン斯基の「火の鳥」、ブルネルラの両組曲である（28MG0852）。

いつも思うのだが、指揮に聞くバーンスタインはひとくちにいってロマンティストである。バーンスタインにとって音楽は憧れの的であり、夢と理想の対象である。バーンスタインは音楽に対していつも燃える心をもって挑んでいる。燃焼こそが終極的目的だと信して疑わぬ音楽家に属する。具体的にいえばその演奏は無機的・人工的に傾くことがなく、音にはぬもりがあり、音色は暖色系のものである。音の感覚性が強烈歩きすることもない。そして音楽の運びには豊かな起伏があり、呼吸

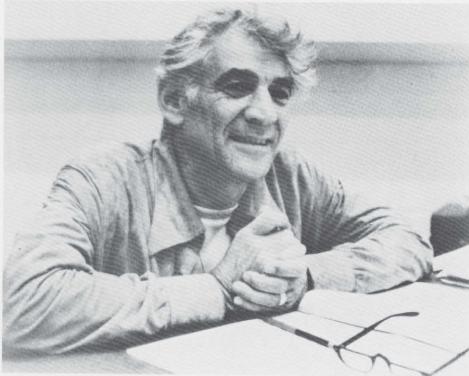
が息づいていて、歌のよろこびがこめられている。そこからは熱い思いも届いてくる。いうなればカロリーの高い、ヴォルテージの高い音楽をやるのがバーンスタインであり、それは生命の讃美、人間への賛美とも聞こえるようである。人間性の飽くなき伸張と拡充を目指すのが指揮者バーンスタインなのである。

以上のことばは前述の3枚からも聞き取れるのだが、ハイドンとモーツアルトについていうと、いずれも最終樂章が最も聞きごたえがあるという点がいかにもバーンスタインふうだと思う。作品を締めくくる大詰めのクライマックスたるフィナーレでバーンスタインはロマンティストたるの真面目を遺憾なく發揮するのである。モーツアルトの40番はやがて早めのテンポでたたみかけ、そこから烈しい表情を噴き出させている。テンポを早くすることで音の連なりに圧力をかけ、密度を込み、そこから目くるめく表情を引き出してみせる。パッションネイティで底力のこもったフィナーレといっていい。とくに展開部での深い交錯、逆巻、表情は説得力がある。以上を要するに生の充溢、これを「ウェストサイド・ストーリー」に引きついでいえば「動き」の重視から導き出されたものといえよう。

この「動き」の効果はハイドンの「オックスフォード」の第4樂章でも凱歌をあげている。すたすたとした精悍な運びのなかからエネルギーが迫力がほとばしり出て、旺盛で若々しい音楽が躍動している。鋭いドライヴ、豊かな前進性の魅力が横溢しているのである。

「火の鳥」については「王女たちのロンド」のふわっとして雰囲気たっぷりのロマンティズムと、つづく「カスチエイ王の魔の踊り」の強烈・隆々としたドラマティズム、いいかえれば「女性」性と「男性」性のコントラストの効果だけを指摘しておこう。「ブルネルラ」もバーンスタインの手にかかると新古典主義の現代音楽というよりはロマンティックな音楽に聞こえる。柔い音色、旋律の重視がそうちでいる。つまり抒情的なのである。もちろんリズムの活力も忘れていない。

以上に見て来たバーンスタインの「動き」のうしろにダイナミックで知的なバーンスタインの多角的で全人の人柄を見る事ができるのだが、それを貫くものは何にもまして強い人間主義的な姿だと思うのである。



レナード・バーンスタイン

1947年5月のはじめ、聖エルサレムでパレスチナ交響楽団のコンサートを行なわれた。まだコンサート・ホールもない頃で、演奏会場にあてられたのは古びた巨大な映画館「エジソン・ホール」だった。映画館をとり囲んだ無数の群衆のうち、ほんのわずかな人々が入場することができた。コンサートが予定より15分遅れて始まったとき、通路も側廊も音楽ファンによって埋まっていた。

その日はアメリカの俊英レナード・バーンスタイン（28）のパレスチナ初登場だった。当然「レニー」の愛称で親しまれていたバーンスタインは彼女は聖都にまでとどろいていたのである。それにもと、このような熱狂ぶりは空前のことだった。熱烈な歓迎はバーンスタインのなかにあるユダヤ系としてのプライドを高揚するものがあった：事実、聴衆のすべてがユダヤ人だった——ひとりの英兵も、警官も、役人すらいなかったのだ。

バーンスタインが早足でステージに現われた瞬間、拍手喝采の波が押し寄せてきて、彼がオーケストラのほうに向きを変え両手を上げてショーマンの『交響曲第2番ハ長調』を振りはじめると、パレスチナ響創立いらのオールド・ファンは「トスカニーニか1936年にこの楽団の初のコンサートを振ったときに受けた拍手喝采よりも凄い」と言った。

バーンスタインは、ひんぱんにオーケストラといっしょにハミングしたり歌ったりしながら、バトンなしで指揮をとった。次の曲目はバーンスタイン自作の『エレミア交響曲』（交響曲第1番）だった。そのスコアはアテネ、カイロおよびエルサレムのどこかに迷いこんでしまい、新しいスコアが航空便で届いたのはコンサートのわずか3日前だった。しかし、バーンスタインは巧みに70編成のパレスチナ響を指導して最大の効果をあげた。バーンスタインの若書きで、マーラーばりの交響曲の最終樂章『哀歌』ではメゾ・ソプラノ独唱が旧約聖書『エレミアの哀歌』からの歌詞をヘブライ語で歌う。「ああ、むかしは、民の満ちていたこの都……今は寂しいさま座し……」と、エレミアは愛するエルサレムが略奪され、汚されて廃墟となつたことを嘆く。激しい怒りと绝望感ののち、主への祈りによつて曲は閉じられる。ヘブライ語を解する多くの聴衆は演奏が終った瞬間に静まり返り、場内の各所から啜り泣きがきこ

えていた。我に返った聴衆は万雷の拍手をバーンスタインへ送り、彼は5回も答礼に現われなければならなかった。

さいごにバーンスタインはラヴェルの『ピアノ協奏曲ト長調』の弾き振りで聴衆をわかせた。ピアニストとしても素晴らしい腕をもっているバーンスタインは当時モーツアルト、ラヴェル、シストコーウィチのピアノ協奏曲の弾き振りをやってファンを喜ばせた。特にラヴェルの『ト長調協奏曲』（両手のほう）はレニーの18番だった。

翌日、死海で水泳を楽しんだのち、スラックス＆スポーツ・コートにくつろいだバーンスタインは記者連に熱を込めて語った。『パレスチナ交響楽団は世界最高のオーケストラの1つになる可能性をもっている。今秋にはアメリカ演奏旅行を決行すべきだと思うが、その前にひとりの指揮者のもとで、がっちり2ヵ月間、ハードなりハサウルをやる必要がある』。

バーンスタインはエルサレムの現代風なエデン・ホテルの窓越しに夢見るよに空を見つめながら語ったやいた：「わたしがその仕事をやれたら嬉しいんだかなあ』。

●砂漠のモーツアルト

1948年5月15日、イスラエル国が誕生した。パレスチナ響も当然イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団（IPO）と改称された。その年の秋、73歳の男たちから成る IPOはレナード・バーンスタインのもとで8月間に7回のコンサートを行なった。その後、バーンスタインは旧約聖書にしばしば現われるベールシェバの町で史上初のシンフォニー・コンサートを行なうことになった。2台のおおぼろバスに分乗した楽団員たちはイスラエル南部のネゲブ砂漠を越えなければならなかった。バーンスタインも楽員といっしょに堅い木の席にかけ、がたがた揺られながら荒涼とした砂漠地帯を渡つていった。

ベールシェバでは広い空き地が演奏会場となった。バーンスタインの指揮する IPOはほぼ1,000人の兵士たちのためにモーツアルト、ベートーヴェンとガーシュウィンを演奏した。彼らはベンチをいっぽいにし、残りの者たちは砂の上にすりこむか、まわりにあわるアラブ人の家の平べったい屋根の上によじ登るかして、むさぼるように音楽に聞き入っていた。『ラブソディー・イン・ブルー』の弾き振りで、バーンスタインは平ら

な岩の上にバランスをとって置いた椅子にかけてピアノを弾いていたが、椅子がすべり落ちそうになるため腰で弾かなければならなかった。あわてて第1ヴァイオリン奏者が椅子を支えるのだった。

IPOは5月にイスラエル国成立の式典でイスラエル国歌「ハイティクヴァ」の演奏していら、70回のコンサートを行なってきた。そのうちの23回は戸外で演奏された。じっさい IPOはイスラエル國よりも年長だった。12年前にアルトウーロ・トスカニニがさいしょのコンサートを振ったときからパレスチナ響として知られていたのである。IPOの演奏会場だったオーエル・レッシュム・ホールのキャバシティは1,100席にすぎなかったので、IPOは音楽ファンの要望にこたえるため同じ曲目のコンサートを9回繰返さなければならなかった。

8週間にわたるイスラエル滞在中、バーンスタインは戦火に荒れたネグバという村に女性と子供たちが戻ってきたと聞いて、彼らのピアノ・リサイタルをえるため單身車を走らせた。IPOの客演指揮者としての任務を完遂したバーンスタインはイスラエルじゅうを動き回った多忙な8週間に、あらゆる瞬間にエンジョイした。彼はイスラエルを去る直前にこう言った：「実をいとくばくは自分が初めて砂漠にモーツアルトをもっていたと思っていた。しかし、モーツアルトはすでに砂漠にいたことをささとったってわけさ」

●指揮は愛の行為

IPOを初めて指揮していらい今年で38年、バーンスタインにとって IPOはもっとも長くつきあってきたオーケストラである。ここ数年、バーンスタインのレコーディングは主として IPOとのライヴ録音によっている。バーンスタインは IPOの精神的な父である。バーンスタインは比較的最近“指揮”についてこう語っている：「私が指揮することを愛する理由は私が指揮するビーピルを愛しているということです。私はその人たちのために我々が演奏しているビーピルを愛しています。それは素晴らしい愛の行為なのです……私が指揮するあらゆるオーケストラが愛の行為です。私は恋人を選ぶようにオーケストラ

を選んだりはしない。どのオーケストラでも恋人になり得るのです：ウィーン、ニューヨークあるいはイスラエル・フィル、ボストン、ロンドン響、あるいは学生のオーケストラだっていいのです」。

〔ヘーナ・マテオブロス著『マエストロ』（ハッキンソン社、1982年）〕

とはいって、バーンスタインにとって IPOが最も長く密接なきずなで結ばれたきたことに疑問の余地はない。



エルサレムの新・旧市街の街並み。雨露の間から姿を見せた太陽。

広島平和コンサートで8月にもレナード・バーンスタインは来日したわけだが、その時の中曲目は彼の交響曲第3番「カディッシュ」であり、記念レコードとして特別販売されたものはイスラエル・フィルハーモニーとの共演盤であった。

この交響曲第3番「カディッシュ」は20世紀の「祈り」の音楽として最高のもののひとつだと思うが、バーンスタインの自作自演盤（MG 1153）はまことに類を見ない迫力のある名盤である。とともに、この交響曲は1963年12月10日にイスラエル・フィルハーモニーによって世界初演されているのだが、1977年の改訂版によるレコードは、作曲者の指揮の下、ソプラノはモンセラ・カラリエ、語り手はマイケル・ウェーガーがつめ、ウィーン青年合唱団と少年合唱団が共演している。レコードによるデータによると1977年8月にマイン川大学創立500年記念のために同地のラインゴルドハレで録音されたものだそうだが、バーンスタイン自身にとっても満足のいく仕上りだったにちがいない。

イスラエル・フィルハーモニーというオーケストラは別にバーンスタインの作品に限らないが、精神的統一感を持ったアンサンブルであって、その燃焼力が高度な次元に達した時、他のいかなるオーケストラも及ばない表現力を持っている。1936年にパレスティナ交響楽団として発足し、1948年にイスラエルの独立と共に今日の名称になったことは、よく知られているが、そのおよそ半世紀の歴史の積み重ねが、このオーケストラの独自の表現力を産み出していったのである。

創立当初は「弦のイスラエル」という評価もあったようだが、今日ではイスラエル生れのメンバーが大半を占め、ロシア系を中心とした移民組は全体の3分の1といわれており、文字通りのイスラエル・フィルハーモニーとしての地位を確立している。日本には1960年にカルロ・マリア・ジュリーニ、1983年にズービン・メータと共に来日しているが、こんどのバーンスタインとの組合せは、おそらくイスラエル・フィルハーモニーの真価を最大限に發揮するものとなるだろう。というのも、この両者の関わりは長くて深いといえるからである。

1947年といえば、まだパレスティナ交響楽団の時代であるが、若いバーンスタインはすでに指揮者として登場し、翌年の

シーズンから現在の名称となったオーケストラの支柱として大きな役割を果たしている。1951年のイスラエル・フィルハーモニーの北米公演でも指揮者陣の一翼を担ったと伝えられている。こうした過去の経緯もあって、バーンスタインの自作自演シリーズでも、両者は見事な呼吸を示している。

交響曲第1番「エレミア」（MG 1151）には「子チエスター詩篇」も組合せられているのだが、クリスチ・ルードヴィヒのソロも含めて、バーンスタインの出世作にこめられた愛情がオーケストラの隅々まで浸透していて、聴くものの胸を打つ名演となっている。交響曲第2番「不安の時代」（MG 1152）はイスラエル・フィルハーモニーとも密接な関わりを持つルーカス・フォスのピアノを加え、作曲者の多面性を浮き彫りにしている。そのあとが、すでにふれた交響曲第3番「カディッシュ」であるが、この3枚のレコードはおそらく次の世纪の人びとも愛聽されるにちがいない。

私はこの3枚だけを細かくふれるつもりであったが、ボリドールの担当者が他にも多くのレコードを選んでくれていて、それをまとめて聴く機会に恵まれた。の中でも傑出しているのが、「セレナード」と「ファンシーフォリー」を組合せたもの（MG 1246）で、「セレナード」のヴァイオリンはギドン・クレーメルが担当している。この曲が1954年にイスラエル・フィルハーモニーによって初演されている事実を知らなかったが、曲の組合せを含めて、これは推賞されるべき名演である。もう1枚「ディヴェルティメント」を中心としたもの（28MG 0449）は、なかなか洒脱な味わいを持っているが、ボストン交響楽団との組合せのほうがより適しているのではないかという感想を持った。

他のオーケストラとの組合せのレコードでバーンスタインの自作自演盤をさらに聴いているが、ここではそのことについて筆をのばす必要はないであろう。バーンスタイン＝イスラエル・フィルの焦点だからである。以上5枚のレコードで、もし1枚だけということになると、交響曲第3番「カディッシュ」をとるが、2枚となると「カディッシュ」と「セレナード」となり、3枚となると逆に交響曲の3部作ということにはしないかと思う。このあたりの選択には個人差があるものだが、私なりの評価がそういう結果を導びき出したと思っていただきたい。



バーンスタインとイスラエル・フィル

ところで、イスラエル・フィルハーモニーはジュリーニ（1960年）とメータ（1983年）によって日本公演を行っており、この四半世紀の間にずいぶんと変化したという印象を持っている。そのことについては前回の来日公演の折にも書いているので、ここでは繰り返さないが、なんといってもバーンスタインとの組合せが実現した意義は大きい。発表されているプログラムではマーラーの交響曲第9番という大作、それにバーンスタインの作品にプラスしてブームスの交響曲第1番という組合せ、それぞれイスラエル・フィルハーモニーの実力の発揮を見るにふさわしいのである。「弦のイスラエル」の時代から50年の歴史を積みあげて、文字通り各セクションの充実したオーケストラであるが、なんといっても精神性の高さが、他の追随を許さぬ域に達している。マーラーやブームスで場内が静まり、そして高揚する雰囲気を今から想像することが可能なのである。

ところでジュリーニ＝イスラエル・フィルの初来日は1960年12月、そしてバーンスタイン＝ニューヨーク・フィルの初来日は翌61年の春であった。ざっと25年前のシーズンということになるが、この期間の日本の音楽界の変貌ぶりはまさに急展開というのに驚くべきである。

私の個人的な回想を書かせていただくと、イスラエル・フィルハーモニーは日比谷公会堂でどうもまだ暖房設備が整っていない、厚着をして出かけた記憶があるが、ニューヨーク・フィルハーモニーのほうは東京文化会館のこけら落として季節もよかつたが、新しい時代が来たという実感があった。まさにふたつのオーケストラの来日の間に東京の音楽地図は変わらしていったのである。それから25年の歳月が経ち、バーンスタイン＝イスラエル・フィルの組合せを迎える。バーンスタインが眞の巨匠性を持てば、イスラエル・フィルハーモニーも一流的の賛美を身につけてきた。まことによい時期に、最高の組合せを聴けるというのは、ひとつの至福というべきである。

バーンスタインはかつてニューヨーク・フィルハーモニックの常任指揮者を務めていた時代にいまなお忘れない印象を残している。どのような作品であれ自身の発見と感受性による解釈を示していたからで、それこそ天才を証明するようなものではなかつたろうか。もとより、作品の確かな読解力がなければ発見することはないのであり、ただ個性を主張しようと奇妙な思いつきをやってみせるものが多いし、作品に対する充分な理解力がないところでは共感も挑戦もなく、いたずらに世の中にはやりすたれをあおって目立ちたがるものが多い。今日の指揮者たちは読解力や理解力をどう見るのではなくて、たとえばバーンスタインに追従して恰好よく振る舞い、人気を競ってどれだけ売れるかが問題だけのようだ。それでもオーケストラ音楽が盛んに見えるのは、指揮者の自己表現とか個性とかにかかわらないコピーが氾濫している世の中で聴衆が真響を聴き分けられなくなっているせいだろう。

何が新しいものは問題をはらんで現れてくる。もう20年の昔になるが、バーンスタインがニューヨーク・フィルハーモニックを指揮したブームスの交響曲は、私にはすれば異質な音楽と出くわして戸惑うばかりだった。そこには絶叫するブームスがいて、しかも見えを切るほどの晴れがましい舞台に上っている。私はブームスというのは若い時分から老成していく際渋な表現方法を好むと思っていたから、そんなバーンスタインのダイナミックに斬り込んだ解釈は背を向けたくなるようなものだった。だが、その貌く迫ってくる起伏と鮮明な表情には初めて知る魅力があった。何がそれほど違った印象を与えたのか。第1交響曲の場合、ブームスが苦心修軀した対位法、従って巧妙とはいえない書法を、バーンスタインはすべて熱烈に肉体的な力の噴き出るところとしている。當時まだ健在であったブルー・ワルターが、そこを言いたいことも言いからず、甘美なオーケストラの響きに懐んで含めるよな味わいある運びを示していくのと、相違は明らかだ。ただ慣れる知る者のみが共感に浸ついた演奏から見れば、バーンスタインは別な世界に生まれてきたようなものである。

しかし、いまやそんな別の世界がこの世界なのであって、ブームスの第1交響曲がどれほど精力的に躍動するダイナミズ

ムを表わそと、誰かが驚くようなことはもうあるまい。バーンスタインはこうした世界にブームスを引き入れた開拓者の独りだといいてよく、客觀主義的な解釈の土台を築く大きな力があった。そのダイナミズムに造形的な安定感を確保した演奏はいまや規準的な意味すらもっている。ブームスの第3交響曲を聴くとき、私は演奏の開始にどれくらい蓄積した肉体的な力が突き上げてくるかを注目するが、そして堰を切ったように流れ出てくるものを追おうとするが、今日、いったい蓄積した肉体的な力いうべきものはあるのだろうか。バーンスタインを含めた現代の指揮者たちから、そういう音楽の前提となっているような内心性なるものを感じたところが私は一度もない。バーンスタインがニューヨーク・フィルハーモニックを指揮したレコードでは、第3交響曲は見通しよく進展していくて痛快であり、どの樂章も静かに終るところが健やかな満足の体である。客觀的な解釈は無表情な演奏に陥りやすいし、アカデミズムの弊も少なくないが、バーンスタインは作品に特別な親近感を抱いているような表情で訴えてくる。

この指揮者がニューヨーク・フィルハーモニックの常任指揮者を辞めて、ヨーロッパで盛んに活躍するようになってから、いろいろと変わったところはある。かつての輝いの表情には翳りが出ており、また、ヨーロッパのロマン主義的な伝統に帰依しようとする方向を見せてることも否定できない。しかし、そういう個人的な問題以上に、近代音樂を支配していた西ヨーロッパが、その伝統からほとんど逸脱してしまったという事態が起こっており、バーンスタインは、過去のイタリア音樂やドイツ音樂やフランス音樂が美学上変質した後の、いわゆる大衆化したクラシック音樂の世界で、他のどんな指揮者よりも重要な働きをしているといえるのではないだろうか。

バーンスタインがマーラーの復活に開闢した功績は大きい。それはなかなかまじい現代の歴史であって、未曾有の経済的反映を諷諭している時代に炸裂した人間性の矛盾が、バーンスタインのマーラーからはあたかも巨大な壁画を観ているような魅力とすらなって溢れ出てくる。マーラーは「私の時代が来るのだろう」と言い遺していたが、半世紀たって現実になったものを、今こうして確かめることができるのだ。いや、マーラーの解釈

者として、ブルー・ワルターやクレンペラー、メンゲルベルクやシェルヘン、ホーレンシュタインやバルビローリなどの偉大な足跡を忘れるわけにはゆかない。けれども、バーンスタインは、マーラーをそういう過去の世界と切り離して現代に否も応もなく引っ張り込み、衝撃的な精神と肉体の力が湧いてくるところとしている。

そんなマーラーにあって第4交響曲は私が初めからずっと新鮮な喜びを感じつづけているものだ。激変するテンポを軽妙自在にこなしながら、あらゆるフレーズを光明に彰り込めた爽快な演奏は、出色的のレコードとしていつまでも聴き飽きない。そのバーンスタインがバコバの繁縝きわまりない指示によく同調して、マーラーになりきったかのような感情移入を見せるところで、むしろ現代の息吹が伝ってくるのは、バーンスタイン自身の発見と感受性が写かってのことだろう。それは、人間が都会の生活で失ってしまった自然を描き出そうとなるが、大自然への憧れや大自然保护を感じる懲りや大自然保护に生きる喜びを歌い上げている。マーラーが童心に帰ってメルヘンの世界を思い描き、天国的な生活を夢見た作曲のありさまとは、やはり異質なものがある。当然のことであって、そういうところにこそバーンスタインの解釈が純正な光を放つのだ。夥しいコピーの中へ、この交響曲も埋もれかかっているような状況で、真顔を聞き分けるのは耳しかない。バーンスタインがニューヨーク・フィルハーモニックを指揮した第4交響曲になって終楽章の「天国の生活」を歌うレリ・リストは黒んぼのあどけない美少女が踊っているようでびっくりさせたものだが、それも郷愁をそそる西ヨーロッパとはちがった新しい世界の魅力となっている。しかしながら、そんな世界はおよそ20年たっても色褪せないだけでなく、それ以後二度と見いだすことができないのである。

私はバーンスタインが1970年の大阪でニューヨーク・フィルハーモニックを指揮したマーラーの第9交響曲にもっとも好い思い出がある。マーラーが生き存えることに絶望し、死を憧れたり恐れたり煩悶しながら諦念へと沈んでゆく第9交響曲は、バーンスタインの手でむしろ未知の世界を開けてきたかのよう希望すら感じさせたのだ。そこでは作曲家として野心を燃え



レナード・バーンスタイン

立たせていたせいかもしれないが、ちょうど15年を経て、現代のバーンスタインがその交響曲に同様な解釈をとっているのかどうか。マーラーの作曲技法が現代音樂へと新しい道を拓いたというようなことは、現代の作曲家がマーラーに肩を並べていろいろ初めでいることであって、実際には比較しようもないだろう。バーンスタインによってマーラーの音樂は何なのかと、ここでまた新たに問いかけることができる。

バーンスタインがニューヨーク・フィルを去ってから、とんと彼の姿を見かけなくなったなあと思っていたら、ある年とつぜんTVだったか、白髪と、アゴひげをたくわえた、まるで浦島太郎の里帰りのような彼の容貌に出てくわして、びっくりしたことがある。

てっきりバーンスタインは作曲のみに専念して指揮のようなショウマン（バーンスタインにはこの表現は当たっている！）稼業はオサラバしているのかと思っていたら、それがそうでなくて、相変わらずアメリカ仕込みのお尻ふりふり、カエル飛びドンダンパン発汗過剰気味指揮法で、ヨーロッパ樂壇を席捲していたらしい。

詫び脱綴するけれど、カラヤンか「アメリカに生まれていたらどうなってただろうなあ、などとよく考える。

おそらくカラヤン専用の冠用語になっている「帝王」は存在しなかったと思う。アメリカはブルジョアという⑩階級はあっても、貴族という⑩階級がない。多民族で成っているアメリカ式の横一列民主主義の前には、いくら簫士カラヤンでも手が出ないだろう。

それに一番いけないのはカラヤンはなんたって暗い。人をいつも見下ろそうとする性格は、ヤンキーエロスをカチンとさせる。

まあせいぜいしこたまお金を貯め込んで、興業主になるのが勢いっぽいんだろう。

ついでにレニー・じやなかった、バーンスタインが（レニーとか、レーガンのロンとかといった愛称は嫌いである。アメリカの軽薄さを暴露しているようだ）ヨーロッパに生まれていたら、饑舌と多角才能が災いして、これもドサ回りの興業主で終わるだろう。

（お互い生まれるべき国に生まれてよかったというものだ）ぼくがはじめてバーンスタインに出会ったのは、今から30年以上も前の、中学生から高校生になる頃だと思う。友人の持っていたショコラヨーチ「交響曲第5番」のレコードだった。

この頃のウブな少年の感性に、力まかせにぶちましたような強烈なサンドはショックだった。

ぼくの記憶にまちがいなければ、たしかレンジングラードのライブ録音じゃなかったかと思う。

バーンスタインという名は、もう華々しいというよりケバケバしい指揮者という固定観念を抱いてしまった。

このあと、あの「ウエスト・サイド・ストーリー」という映画が封切られ、その友人にいやがる手を引っ張られて、大阪のOS劇場に観にいった。

スクリーンは標準サイズだったかシネマコだったか忘れたが、チャキリスを主人公とする不良グループが、指をバチンバチンと鳴らしながら、長い脚をスクリーンいっぱいにのばすのを見て、びっくりしたのを覚えている。

脚の長いのは、ゲリー・クーパー、ヘンリー・フォンダのカウボーイぐらいたと思っていたのに、この若造らの脚の長いのには驚かされた。

音楽がぱくの嫌いなジャズっぽいのにもかかわらず、非常に感動させられた。ナタリー・ウッドが歌うところの「I feel pretty」は、とてもチャーミングでいっぺんにバーンスタインが好きになってしまった。

いまこの稿を書きながら、先日発売された「ウエストサイド」のバーンスタイン指揮の全曲盤をCDできいているのだが、キリ・テ・カナワ、カーラースの当代唯一のオペラ歌手起用には少し疑問を持つ。

この曲はミュージカルであって、オペラ歌手のピアラートのきいた歌唱法は返って、異和感を与える。英語の發音もどことなくアブナカシ。売れることうを考えての歌手起用なら、何をかいわんやだけ。

ぼくはバーンスタイン、ニューヨーク・フィルの演奏会を過去二度みるチャンスがあった。

そのうちの一回は、奥さんが急病とかで来日直前になって、バーンスタインが来れなくなって、別の指揮者が立った。それでぼくはいくのを止めた。

二回目は、たしかマーラーの「巨人」を聴くことができた。拍手がなかなか鳴り止まなくて、（アンコールがあつたかどうかよく覚えてないが）、樂員を舞台から退場させて自分ひとり何度も舞台に現われた。そして自分の腕時計を指差しながら「もう遅いからカンベンしてくれ」といったセスチャアをしてみせたのが印象に残っている。

どういう演奏だったかというと、これがよく覚えていない。大変な熱気がホール全体に立ちのぼっていたという空気だけは鮮明に記憶している。

シロウト耳で斷定しかねるけれど、バーンスタインは、その場の聴衆とオーケストラを盛り上げる名人ではなかろうか。一種の催眠効果を作り出す魔術を心得ているのでなかろうか。

だから必然的にレコードよりもライヴでのバーンスタインの方が、彼の魅力を十分に出来るのではないかうか。

以前FM放送で、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲第14番嬰ハ短調を、ウイーン・フィルの弦楽合奏で聴いたことがある。全曲通してスローテンポでいくものだから、退屈極まりない。バーンスタインがベートーヴェンの弦楽四重奏曲の中でも最高位に属するこの難物を、あえて弦楽合奏に編曲した、彼の意図がよく分らなかった。

ところが、これももし現場の演奏会で聴いたとしたら、このスローテンポと合奏は彼流の作法で知らず知らずうちに、恍惚境へ引き込まれたかも知れない。

さてこれからバーンスタインは、どこへいくのだろうか。ルネサンス型万能人（ショーンバーグ=「偉大な指揮者たち」）は、結局創造の完結をみないで、もっと分り易いいえば、どれもこれも80点90点の優秀な成績で人生を終えてしまうような、そういう危惧にとらわれる。

「死んでしまえばおしまいよ」のストコフスキイの二の舞いを踏んでもらいたくない。

カラヤンのように死後の名聲を不動のものにしようと、「自伝」にまでプロデュースするといったアン・フェアなことはして欲しくない。

ぼくはバーンスタイン・ファンにしては、そんなに沢山のレコードを知っているわけではない。彼のマーラーの第2交響曲の「復活」は今でも最高の演奏だと信じているし、中学生時代に聴いたショスタコヴィチの第5交響曲も、歴史的名盤だと思っている。

作曲の方では、「カンディード」序曲、「ミサ曲」、第3交響曲「カディッシュ」ぐらしか聴いていない。

やはりこれもシロウト耳でいわせてもらえば「ウエスト・サイ

ド・ストーリー」を凌いでいるとは、とうてい思えない。

バーンスタインの資質は、ミュージカルとかオペレッタといったしゃれのめす世界の方が向いているような気がするけれど、専門筋の見方はまた別かも知れない。

「指揮」と「作曲」の二者択一を迫ったらバーンスタインはどちらを選ぶだろうか。

ともあれ、今回のイスラエル・フィルとの来日は、その辺の答えを出してくれるかどうか、今から楽しみにしている。



ついでにねまもた指揮しちやえ

この7月4日、アメリカのインデペンデンス・デイの晚。私はたまたま、サンフランシスコのホテルにいた。ゴルデンゲイトの名物花火も見ず、何気なく部屋のテレビをひねる。公共放送チャンネルからいきなり、耳になじんだ『ウェスト・サイド・ストーリー』プロローグの旋律が飛び込んできたじゃないか。おや？ クローズアップされた指揮者は、果せるかなレナード・バーンスタインである。特徴のある白髪。水玉の汗をあふれさせた顔。高く大きな鼻はいよいよするどく見える。しかもふえた表情は、いささかフランスのルイ・ド・フィニスに似たなア、と私は思わず対面に突拍子もない連想を第一印象した。——首都ワシントンでの独立記念日祝賀、野外大演奏会の実況録画なのであった。

巨万のワシントン市民が、Tシャツ姿で芝生の大広場を埋めつくし、後にはクルマも裏り回る首都景観の大気のなか、管弦楽のPAに陶酔している。デリケートなビアニシモなど味わうべくもない(?)巨大トボスだけれど、ふしげに『ウェスト・サイド・ストーリー』は、微妙な弱音まで含むのにグサグサ受け手へ突き刺さるダイレクトな迫力が、このシチュエーションにこれ以上ふわわしい楽曲はあり得まい、と思えるピッタリの衝撃効果と説得力を生み出してゆく。「アメリカだなあ、アメリカだ」と私は呟然と、ひとりナショナル交響樂団を指揮しつづけるバーンスタインの白服の踊りを、ブラウン管にみつめ出した。音楽も、風景も、聴衆も、指揮者もでかでかと強烈なアメリカである。

むろん9月にレナード・バーンスタインが来日し、イスラエル・フィルで『ウェスト・サイド・ストーリー』を振ることは知っていた。だからこそ一層、目前に展開した上演に聴き耳も立てたのだ。聴きながら気づいた。これは予断を訂正しなければ、と。

日本公演のレパートリーに、バーンスタインは『ハリル』その他、自作としてこの『ウェスト・サイド・ストーリー』(以下WSS)だけ選び出している。おそらくこれが、最も通俗な意味で彼のポピュラリティを代表する一曲にはちがいないが、それ以上にWSSの本質は、これが「アメリカ」をシンボライズできることにあるのではないか。いや、それによってこれは同時に、レ

ナード・バーンスタインそのひとを象徴できている……だから彼はこれを85年の日本へ提出するのだ、と。

*

いうまでもなくWSSのオリジナル型は、57年に初演されたバーンスタイン作曲のステージ・ミュージカルである。尤も私たち日本人は最初にこれを、61年封切の映画『ウェスト・サイド物語』のかたちで知った。渡航も代替も自由でなかった当時、現場アメリカで舞台を観ることなど想像のほかの奇跡的例外だった。日本人がオリジナルを日本の舞台で「フォーマンスできるようになったことなど、あとのあと話である。

私は今も鮮明に、第1回試写が以前の大好きな基地・東京劇場でおこなわれた朝を記憶している。ガランとした場内、ソーラーバスの鋭角的なタイトルにダブってニューヨークの垂直俯瞰が映り出し、乾いた弱音が指をはじくユニゾンをピッチカートみたいにシンコペイトさせてくる。その瞬間の衝撃から、全編を觀おえ、アメリカ・ミュージカル親が一変して呆然と声もなくした三原橋のうえの私まで、切れ目なく思い出す。一緒に見たのはミュージカルに首ったけの美人ラジオ・ディレクターで……といったことはモウどうでもいいが、車のなかでそのひとに、自分は今、ここまでこのミュージカル映画を全否定したい気持ちにかられて、と白状したのは現在なおううだから、忘れる事もできない。

勿論、映画『ウェスト・サイド物語』は、振付のジェローム・ロビンス、監督ロバート・ワイズを含めての映像結晶である。作曲バーンスタインひとりを云々できる作品ではなかった。特にWSSの場合、向こうのクレジットが「この作品はジェローム・ロビンスのコンセプションによる」とことを強調する配慮は、くどいと称していいくらいである。

しかしここで、旧い穀の破壊の向うから切り裂くような鮮烈な発光が届いて、その光の原点に音楽家レニイが存在したことだけはまれない実感で、その音楽あれはこそ「トゥナイト」のペルコーニー絶唱も、ジムやガレージの名ダンス・シーンも生まれ得たことは明白やすであった。以降半世紀、結局レナード・バーンスタインは『ウェスト・サイド・ストーリー』においてミュージカルを、シンガーが一点に止って歌うオペレッタ

から、群像が全体で動き踊る肉体行動のダンス媒体へ変えた……それによってミュージカルは時代という「街」へ解放された、という評価は歴史のなかに定着した。今アメリカ・ミュージカルはよくもわるくも『フォーティセカンド・ストリート』流レヴィユーに回顧的な洗練をとげている。それでさえWSSという水源がなかったら(つまり戦前・戦中調のポピュラー音楽観だけでは)生まれ得なかつたらう流れであることを、痛感する。

そのかんWSSはレコードの世界でも、ミリオンセラーとなつた映画サントラ盤を頂点に特筆すべき歴史を作ってきた。「特筆」のひとつは、少なくともこのオリジナル舞台や映画関係の盤に、バーンスタイン自身の指揮による演奏がみつからない現象である。

バーンスタインが自身、WSSを指揮したレコードでは、私の知るかぎり、舞台・映画から離れた2つか印象的である。ひとつは今回の公演と同じ『シンフォニック・ダンス』という肩書のWSS(ニューヨーク・フィル演奏のCBSソニー盤。編曲はレニイと、シド・ラミン、アーウィン・コスターの共作)。もうひとつは最近出た、キリ・テ・カナワとホセ・カラースがうたうオペラチック・スタイルのWSS(編曲は同じ3人)だ。

私はこれを、重要な示唆と受けとめる。作曲家レナード・バーンスタインにとってWSSは決して、ステージ・ミュージカルであり映画ミュージカルであるにはちかいない。が、指揮者レナード・バーンスタインにとって、この作品はリズムの交響詩であり、同時にオペラに近いカントの対象である、これら2演奏はこの傑作のいわば音楽収穫の焦点を問わざ語りに告白するからである。このミュージカルのアリア的ナンバーには、通常のミュージカル歌手では乗り越えにくいソプラノの高音がある、と言われづけ、その焦点をレニイはひとつ、テ・カラスの歌唱で実現できた。

が、更に重要な焦点はシンフォニック・ダンスにある、と私は信じる。なぜなら、WSSが本質するのはなにより青春性であり、青春を前進への動きに凝集してとらえる踊りの行動力こそ、またレニイ自身の本質だからである。作曲家にして指揮者、ピアニストにしてテレビ大衆までへの音楽啓蒙家、というレニ



映画「ウェストサイド物語」より



映画「ウエストサイド物語」より

愛息と愛娘に朗唱させ独唱・合唱とオーケストラでうたいあげてゆくカンターダだった。私はこのひととレニイの姿勢に感動を受けた。ナショナリズムではない。音楽は人をも国をも未来へ動かす、本気でそれを信じ、それを自分のトータルで実現しつづけることにためらいをもたないオプティミズム——その姿勢の明るい若さに感動があった。

『ウェスト・サイド・ストーリー』にはその音が28年鳴りつづけている。シンフォニック・ダンスには、とくにネアカに。私たちはここに悲劇の感傷を聴くのではない。

LEONARD BERNSTEIN

バーンスタイン/イスラエル・フィル 来日記念盤



チャイコフスキ《1812年》

CD 同時発売

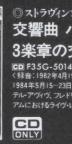
- ◎チャイコフスキ
大序曲《1812年》作品49
幻想序曲《ハムレット》作品67
スラヴ行進曲作品31
イタリア奇想曲作品45
イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団
指揮：レナード・バーンスタイン

特別価格

限定盤

●LP ¥2,000

●CD ¥3,000



イスラエル・ フィルハーモニー

モーニング・コンサート

交響曲第3番「短調(スコットランド)」

序曲《フィンガルの洞窟》

●28MC-0007 ￥28,000 各2,800

◎ストラヴィンスキイ

バレエ「トルッシュカ」

バレエ「情操」

●28MC-0029 ￥2,800

CD F33G-50099 ￥3,500

◎ストラヴィンスキイ

火の鳥「ブルネルモーラ」

3楽章の交響曲

CD ONLY

ウィーン・フィルハーモニー

モーニング・コンサート

交響曲第9番「合唱」

序曲《フィンガルの洞窟》

●28MC-0007 ￥28,000 各2,800

◎ストラヴィンスキイ

バレエ「トルッシュカ」

バレエ「情操」

●28MC-0029 ￥2,800

CD F33G-50099 ￥3,500

◎ストラヴィンスキイ

火の鳥「ブルネルモーラ」

3楽章の交響曲

CD ONLY

モーニング・コンサート

交響曲第1番「ハ長調

交響曲第4番「冬」

●28MG-0016 ￥28,000 ￥8,700

ベートーベン「交響曲第2番「ハ長調」

序曲《プロメテウスの創造物》

●28MG-0022 ￥28,000 ￥8,200

ベートーベン「交響曲第3番「E♭大調(英雄)」

エリモト作曲《悲劇》

●28MG-0023 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第5番「悲劇(運命)」

●28MG-0024 ￥28,000 ￥8,200

ベートーベン「交響曲第6番「鳥園(田園)」

序曲《田園》

●28MG-0025 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第7番「火の鳥」

●28MG-0026 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第8番「火の鳥」

●28MG-0027 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第9番「合唱」

●28MG-0028 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第10番「合唱」

●28MG-0029 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第11番「合唱」

●28MG-0030 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第12番「合唱」

●28MG-0031 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第13番「合唱」

●28MG-0032 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第14番「合唱」

●28MG-0033 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第15番「合唱」

●28MG-0034 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第16番「合唱」

●28MG-0035 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第17番「合唱」

●28MG-0036 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第18番「合唱」

●28MG-0037 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第19番「合唱」

●28MG-0038 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第20番「合唱」

●28MG-0039 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第21番「合唱」

●28MG-0040 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第22番「合唱」

●28MG-0041 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第23番「合唱」

●28MG-0042 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第24番「合唱」

●28MG-0043 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第25番「合唱」

●28MG-0044 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第26番「合唱」

●28MG-0045 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第27番「合唱」

●28MG-0046 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第28番「合唱」

●28MG-0047 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第29番「合唱」

●28MG-0048 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第30番「合唱」

●28MG-0049 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第31番「合唱」

●28MG-0050 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第32番「合唱」

●28MG-0051 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第33番「合唱」

●28MG-0052 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第34番「合唱」

●28MG-0053 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第35番「合唱」

●28MG-0054 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第36番「合唱」

●28MG-0055 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第37番「合唱」

●28MG-0056 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第38番「合唱」

●28MG-0057 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第39番「合唱」

●28MG-0058 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第40番「合唱」

●28MG-0059 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第41番「合唱」

●28MG-0060 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第42番「合唱」

●28MG-0061 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第43番「合唱」

●28MG-0062 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第44番「合唱」

●28MG-0063 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第45番「合唱」

●28MG-0064 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第46番「合唱」

●28MG-0065 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第47番「合唱」

●28MG-0066 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第48番「合唱」

●28MG-0067 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第49番「合唱」

●28MG-0068 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第50番「合唱」

●28MG-0069 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第51番「合唱」

●28MG-0070 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第52番「合唱」

●28MG-0071 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第53番「合唱」

●28MG-0072 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第54番「合唱」

●28MG-0073 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第55番「合唱」

●28MG-0074 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第56番「合唱」

●28MG-0075 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第57番「合唱」

●28MG-0076 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第58番「合唱」

●28MG-0077 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第59番「合唱」

●28MG-0078 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第60番「合唱」

●28MG-0079 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第61番「合唱」

●28MG-0080 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第62番「合唱」

●28MG-0081 ￥28,000 ￥8,200

モーニング・コンサート

交響曲第63番「合唱」

●28MG-0082 ￥28,000 ￥8,200

近未来もののSF小説を読んでいたら、バーンスタインの「遺作」というのが出てきた。SFとはいついびっくりしてしまった。晩年の巨匠が残した傑作なのだと。きっとこの作者は、指揮者バーンスタインの光と暗いいだ後になっても、作曲家バーンスタインは不滅だ、と信じているのだろう。ちょうどマーラーのように、やがてそうなる日が来るのを確信しているのである。

マーラーの時代、人々は作曲家としての力を、指揮者としての力ほどには高く買わなかった。作曲に精出すマーラーを、もっとオペラの指揮をたくさんすればいいのに、苦々しく思っていたわけだ。何とまあ耳の悪い人たちばかりだったんだろうと、当時の聴衆に腹を立てる人は、でもあまりないはずである。その気持ちはよくわかるな、というくらいのもの。

バーンスタインは作曲に専念するために指揮活動を一時中断したときなど、誰もが、作曲などいいから、あれを指揮して欲しい、これも指揮して欲しいと、届かぬ声とは知りながら、わめきたてたのだ。たとえばクリスチンとイゾルデの演奏が発表されるとき、「指揮」はどうした? いつ振るんだ? といい、ついでにイタリアものだってまだいっぱい残っているのに、などと愚痴を述べる。時代が変り、マーラーが古典になってしまふ方へ大して変わってはないのである。

後世に残る傑作をものもしてもらいたい願うのではなく、もっとたくさん指揮して欲しいという、情ない聴衆のひとりとして、聞き直してしまうと、これはあたりまえなのだと思う。あのマーラーを聴いて、リハヤルト・シュトラウスももっとやってくれと注文したり、クリスチンを聴いてワーグナーを全部振らなくてはならないと思い込む、そんな気にならない者が、一体いるだろうか。後世の人には氣の毒だけれど、今せいたくがしたいのだ。

バーンスタイン自身はこういうやっかいなファンにさんざん手を焼いたと見え、スター指揮者などと呼ばれるのが嫌で、自分はバスボートに見えたと書かれているよ「音楽家」だと見られたいと述べているけれど、なかなかそうはいかないだろう。つらい環境で作曲を続けたマーラーの気持ちを、バーンスタインはきっと痛いほどわかっているに違いない。

同じインタビューで、バーンスタインは本当にマーラーに親近感を持っていると語っているが、その理由として挙げている中に、なるほどと思うものがある。

「マーラーは作曲家で指揮者、コスマボリタンで田舎者だった。私も作曲家で指揮者、アメリカ人で国際的だ」と言ったあと、こうつけ加えているのである。

「そして音楽が分裂状態なのを理解している。私はマーラーに非常に大きな親近性を感じている。もしかしたらわれわれは、ちょっとだけ精神分裂症なのかも知れない」

分裂状態といふのは、いくつもの意味があるだろうが、マーラーの音楽と、そしてバーンスタインの音楽を思い浮かべるだけで、そういう……と納得してしまう。

通俗的旋律の出現に悩んでフロイトのもとを訪れたマーラーについては、今さら言うまでもない。ではバーンスタインの曲がどうなのかというと、負けないくらい分裂的ではないだろうか。

たとえば「ウエストサイド物語」。ジャズを取り入れた、ガーシュイン直系みたいなところがある。トニーの歌う「マリア」やトニーとマリアの「トゥナイト」などは、確かに旋律的にはすぐれているが、一時代昔のミュージカルに出てきてもおかしくないような歌だ。決闘に向かう場面の「5重唱」ときたら、実に緻密な声の扱いで、ミュージカルでこんなことをやってもいいのかというくらい、本格的である。おかげで一見何気ないフレーズでも、手のこんだ、生半可な歌手には歌いにくしかけがしてある。やたらに転調はするし、もしかしたら「難解」なのかと思ってしまうたりするところもあるのだ。

分裂的だったら必ずひどい結果になるとは限らないのは、すでにマーラーが証明済み。とはいえ、これまで聴けた、映画のサントラ盤などの「ウエストサイド」では、分裂的なのは、弱点とまではいかないにせよ、目につかないわけではなかった。ところが最近評判のバーンスタイン自身による「ウエストサイド」となると、一見相容れない、混乱に近いような「分裂状態」がひとつずつ見えてくるので溶解して、その活力と熱気が、積極的に音楽の魅力を作り上げている。

指揮者バーンスタインは、いろいろな曲でその驚くべき力を

發揮するだけれど、自作となると、その能力とはまた違った面が現れてくるらしい。つまり、音楽の分裂は作曲者の分裂で、それが分裂のまま不思議な調和を保っていられるのは、一身にそれを引き受けさせて生きている作曲者自身の演奏にしきは無いことなのだろう。

作曲家自身の演奏というのは、曲そのものの出来具合を示すのが主で、別のすぐれた解釈者よりもつまらなくなってしまう場合が多いのだが、少くともこの曲でのバーンスタインの演奏は違っている。

それなら、「親近性」のあるマーラーの場合も、きっと同じように「おばらしい分裂」を示した自作自演を行っていたに違いない。残酷なことにマーラーの自作自演はまったく記録に残っていないが、たとえ断片なりと聞いてみたい。あれだけこまかい指示をスコアに書き込みますにはいられないかったマーラーのことだから、いかに有能でも他人には難しいのを知っていたはずなのである。

もっとも、当時の人々には、マーラーの自作自演よりも、マーラーが指揮するベートーヴェンやワーグナーの方がずっと好まれていたわけで、それもよく理解できる。そして、自作のちょっとおかしな交響曲などよりも立派な名曲を指揮してもらう方がいいな、と思いつつマーラーの交響曲の演奏を聴いて、後世になってこの演奏を断片でもいいから聴いてみたいと願う者も出てくるだろうと、かすかな予感を抱いた人がいたかも知れない。

指揮者としてひっぱりだこのバーンスタインも、自作となると大変少ない回数しか指揮していない。そして、それを惜しがる向きはあまり多くない。でも、マーラーの自作自演を聴いた、当時の聴衆のことを考えてみると、後世には……などと無駄な思いをするよりも、今この自作自演を聴く喜びを味わってしまおう! という気になってくる。

マーラーの「分裂」は同時代人にとって理解し難いところがあった。けれども、幸いにも、(というべきか不幸にも)「(生きる)バーンスタインの「分裂」」は、われわれの理解を絶しているわけではない。すでにマーラーの音楽は強い支持を得ている。ただ時がたったからというだけでなく、おそらく時代その

ものが、マーラーの分裂と共鳴しているのである。マーラーが早くも悩み、バーンスタインがはっきりと意識している分裂の病は、時代を深く侵蝕しているのだろう。バーンスタインの自作自演に、共感してしまう不幸と、共感できる幸福が、すぐに手に入れられるのである。





嘆きの壁



死海のほとりの塩灘沿岸風景

1969年厳しいオーディションを経てI.P.O（イスラエル・フィルハーモニック・オーケストラ）に入団し、以後約8年間を籍した。年間定期演奏会164回、その他特別企画の演奏会、イスラエルフェスティバル参加、外国演奏旅行等々を数え加えれば200公演を越える。定期演奏シリーズが変わる前4日間はリハーサルと夜の演奏会（開演は夜8時30分）とて指揮者、ソリストが常に重なる。朝の練習ではズビン・メータとアイザック・スター。同じ日の夜の演奏会はレオナード・バーンシュタインとアイザック・バーベルマン、といった具合である。このオーケストラは、普通一般的に考えられるヨーロッパ的とかアメリカ的といった概念からは全く異質な存在である。というのは、イスラエル建国以前から世界各地から帰って来たユダヤ音楽家の集まりで、主にロシア系、ドイツ系、アメリカ系、フランス系が主体である。40年前にヨーロッパから帰ったユダヤ人音楽家が集つてトスカニーニとヴァイオリン奏者、バーベルマンを中心にして出来たこのオーケストラの中には、世界各地から一流オーケストラのトップメンバーが集った。私がI.P.Oを去る前年（76年）まで30数年間メンバーでいたホルン奏者（ソロモン・ホルスト）は、フルトヴェングラー時代のベルリン・フィルの第一奏者であった。（その間トスカニーニのN.B.Cオーケストラ首席の仕事を断っている）この様な経験を持った者は他にも沢山いる。しかし近年、イスラエルで育生育ち（サブレ

という）、音楽教育をイスラエル国内で受けて入団する若い奏者が増え、当然オーケストラの音も変わっていくが、良く知られているようにユダヤ人の弦楽器奏者の演奏技術は極めて高く、オーケストラの主役をなすヴァイオリン・セクションの響きは、特記に値する。時々乱暴にも聞こえる底深い弦楽器の鳴りは、世界に唯一無二のものであって、他の何処のオーケストラにも無いと思う。一緒に演奏していて背筋に戰りが走る。さて、今夜の指揮者L.バーンシュタインはレニーの愛称で親しまれ、何かしらいつも特別であった。何か特別かと例記する事は難しいが、あえて云うなら奇跡が起つていたと思えるのである。L.バーンシュタインの音楽がすべてそうさせると云えは簡単であるが、私はL.P.Oとバーンシュタインの何とも云われぬ人間、人種的なふれ合いが起こす現象の様な気がする。彼の指揮は通常4分の4とか、8分の6といった指揮法からは程遠い。そうした見方から見ると彼の指揮を見るのは困難まりない。彼の体が動く、奏者が演奏するというだけ……、両者の間に通う互いの歌が一緒になって……、これ以上書くことは私には難しそうだ。私がイスラエルを去る時、丁度I.P.Oと彼のフェスティバルが始まろうとする4月の上旬であった。私の肩を抱き「ヨシ（私の愛称）お前もかかわる」と一言何か哀しそうに言った事が忘れられない。

（チェリスト・東京アーティスト合奏団代表）

イスラエルフィルを世界の親善大使することは創設者プロニスラフ・フーベルマンの夢であった。

そして結成第1回の演奏会から2週間を経ずしてオーケストラは初めての国外公演の地エジプトへと出発した。トスカニーニがクトを振った。

バーベルマンはイスラエル・フィルを、中東全土に音楽を届ける機動力のある団体にしようという構想を持っていた。エジプトやレバノンへは何回も出掛けた。戦時中、オーケストラはこの二国とパレスチナに駐屯する同盟国の兵士たちのために168回にのぼる演奏会を開催した。しかし1945/46年のシーズン以後は、地域的な政治情勢の緊張のため、近隣諸国での公演活動は中止せざるを得なくなっている。しかしオーケストラは再び文化交流の可能となる日が来るという希望を捨てず、その音楽がエジプトやイスラエルの隣人である国々で歓迎される日は遠くないことを願っている。

設立当初から活発に国外での活動を開始したこのオーケストラを「イスラエルの最も優れた外交特使」と称したのはアメリカ大使モーネ・B・ディヴィスであった。

1951年、オーケストラは大規模な国外公演旅行の第1回として、アメリカとカナダへ出掛けた。クーセヴィツィキとバーンシュタインが指揮者であった。ヨーロッパ公演の第1回は、1955年、クレツキとバーレーを指揮者に置いて実施された。1960年には初めての世界一周公演旅行を敢行し、フランス、アメリカ、カナダ、メキシコ、日本、インドで演奏会を行った。この時はカルロ・マリア・ジュリエーニを首席指揮者、ヨーゼフ・クリップスを客員指揮者、ゲイリー・ヘルティニーを副指揮者を迎えての公演旅行であった。1966年にはメータ、ドライティ、エリアフ・インバルと共にオーストラリア、ニュージーランド、香港で公演した。

六日戦争の後、オーケストラはイスラエル非常基金のために急ぎよ北米1ヶ月の公演旅行を敢行し、16都市で21回の公演を行った。

1968年のイスラエル建国20周年記念行事の一環としてIPOは英国への公演旅行を行い、帰路ウィーン音楽祭に参加して3回の演奏会を行った。

1969年、イタリアのフローレンスの五月音楽祭への参加依頼を受けたのを機に、同年6月イタリア各地にも足をのばした。

1971年にはヨーロッパのほとんどの主要音楽祭に参加。ザルツブルグ、ルツェルン、エディンバラ、ベルリン、フランクフルト、ストレーザ、ヴェニス、ロンドン。指揮者はメータ、クリップス、ケルテス。またソリストとしてはアルトウール・ルーベンシュタイン、ダニエル・バレンボイム、ユーディ・メンツィーイン、ピンカス・ズッカーマンを招いた。

ズビン・メータの指揮とともに1972年、南米公演に出たイスラエル・フィルはその総合的な力を發揮した。それに統いて、メキシコ、アメリカ、カナダ、イギリスと、かつて成功を収めた土地を再び訪れた。アルトウール・ルーベンシュタイン、グレゴール・ピアティゴル斯基、イツァク・バーベルマン、ダニエル・バレンボイムのほかオーケストラのメンバーもソリストとして共演。演目にはイスラエル人作曲家のものが2曲組み入れられた。

ヨム・キブール戦争（赎罪日戦争）の後、IPOは英国とオランダへ親善公演に出掛け、特にオランダ人の支援に感謝の意を表した。

1974年は南北両半球を訪れる年となった。まず8月に南アメリカ・オニオニズム同盟の主催ではじめての南アメリカ公演を敢行。同年さらにユダヤ支援連合会の後援により、新年キャンペーンの主要行事としてアメリカでの演奏を行った。

1975年にも2回の国外公演を行った。まずアルトウール・ルーベンシュタインをソリストとするロンドンでのカラ・コンサートを含む英國ツアーであり、ロイヤル・フィルハーモニック・ソサエティの後援を得て実施された。ロンドンのあと、オーケストラはヨーロッパで2回の演奏会を行った。ひとつはピンカス・ズッカーマンをソリストに迎えてのジュネーブでの演奏会、他にはアルトウール・ルーベンシュタインをソリストとするパリでのもので、これはフランスのカイツマン・インスティテュートの後援によるカラ・コンサートであった。

同年の夏、ヨーロッパ各地の主要フェスティバルからの招きに応えて再びオーケストラはヨーロッパを訪れた。ザルツブルグ、ルツェルン、エディンバラ、ベルリンと回る間に途中コペ

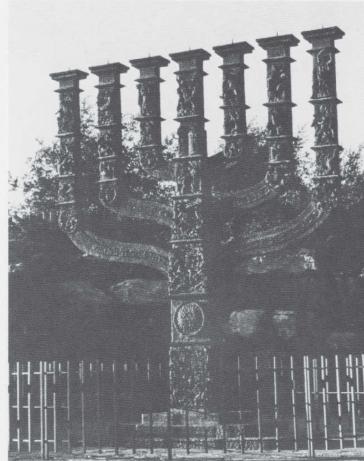
ンハーゲンとスウェーデンでも演奏会を行った。またドイツの6都市、スカラ座での3回を含むイタリア5回の公演を行い、ウィーンのムジーク・フェラインで演奏旅行をめくった。オーケストラ自体にとっても、音楽監督ズービン・メータにとっても、また客演のソリストにとっても大きな成功を収めることのできたツアーアーであった。ソリストとして参加したのは、アイザック・スターイン、イツァーク・パールマン、ジャネット・ベーカー、フィッシャー=ディスクワ、ダニエル・ベチャミー、ユリ・ビアンカ、アルフレッド・ブレデルであった。

1976年夏、アメリカ建国200年祭に、IPOはイスラエル国家の代表として派遣され、カナダでの3回を含む23都市28回という、アメリカ横断公演旅行となつた。指揮は2回を除きすべてズービン・メータであったが、ワシントンとニューヨークでの最後の2回は、レナード・バーンスタインがタクトをとつた。このほか、アイザック・スターイン、クラウディオ・アラウ、ビンカス・ズッカーマン、イツァーク・パールマン、ハイム・タウブ、ユリ・ビアンカ、イェフィム・ブロンフマンらが客演した。

親善大使の任を負つたオーケストラは、各都市で、また南部や中西部の大学でのホールで満員の聴衆に迎えられた。ニューヨークでの最終演奏会はアメリカ・イスラエル文化財団の年次基金募集中活動の一環として同財団が後援した。またシカゴでもニューヨークの場合と同様に同財団はその会員と会友の前にその日頃の支援の実りを証明し、楽しんでもらう機会を提供了のである。

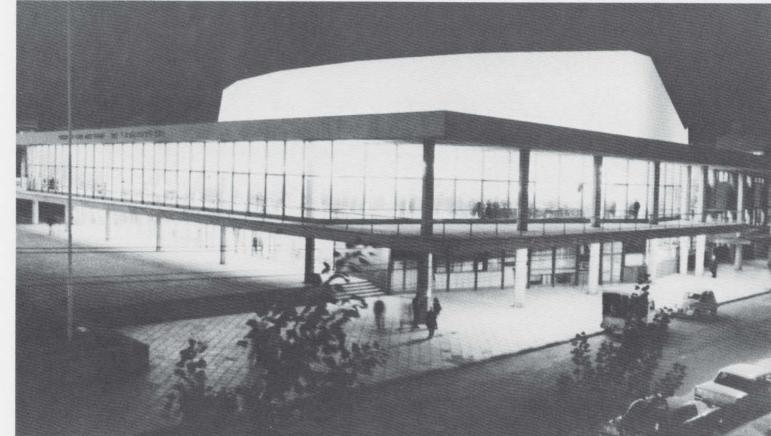
1977年の夏、オーケストラは再びヨーロッパに出掛けた。ズービン・メータ指揮によるフランス・オランジュのフェスティバルを皮切りに、レナード・バーンスタインでオーストリアとドイツ、メータによるスカンジナヴィア巡演、そして最後はフランダース・フェスティバルと、パリのシャン・ド・コングレでのコンサートをメータの指揮により行い、6週間のツアーアーを締めくくった。

1978年は再び遠い国へと出掛ける年となった。オーストラリア放送協会及びオーストラリアのIPO友好協会の主催で実施されたオーストラリア公演は、アデレード・フェスティバルも



イスラエル風のシンボル
含めて大きな成功を収めることができた。6月、ズービン・メータの率いるIPOはイスラエル独立30周年記念コンサートで演奏した。同コンサートは、ソリストにアルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリを迎えてドイツのボンで開催されたものである。

しかしオーケストラによる30周年記念の主要行事は、8月の南北アメリカ大陸の大旅行である。アメリカ（ワシントンDC及びニューヨーク）の演奏会はズービン・メータとレナード・バーンスタインが指揮をし、メキシコとブラジル（リオ・デ・ジャネイロとサン・パウロ）ではエドワルド・メータ、エリア・フ・インバル、シャルル・デュトワが指揮台に立つた。参加したソリストは、ピアニストのアリシア・デ・ラローチャとイェフィム・ブロンフマン、ヴァイオリニストのイダ・ヘンデルとシリヴィア・マルコヴィッチ、チェロのミーシャ・マイキーであった。



イスラエル・フィルの本拠地、F.R. マン記念講堂

1979年、ヨーロッパの著名音楽祭に参加した。まずザルツブルグに行き、バーンスタインの指揮により、プロコフィエフとメンデルスゾーンの親しみ深い曲によってコンサート旅行の幕を開けた。同じ曲目をミュンヘンでも演奏し、ここではレコーディングも行われた。続いてズービン・メータが率いるIPOはヨーロッパの主要都市を訪れたが、その中にはラップランドとフィンランドの首都や、ロイヤル・アルバート・ホールでのプロムナード・コンサート、ミラノのスカラ座での演奏会も含まれていた。合計18都市での27回の演奏会はそれまでを上回る成功で、聴衆も熱狂的に沸いた。参加ソリストは、アイザック・スターイン、ダニエル・バレンボイム、ティートリッヒ・フィッシャー=ディスクワ、アンネ・ゾフィー・ムター、シリヴィア・マルコヴィチという華やかな顔ぶれであった。IPOはヨム・キブール前夜にテル・アビブに戻り、2日間だけの休息ののち、1980年の定期コンサート・シリーズを開始したのである。

1980年夏、ズービン・メータと共に南米公演に出たIPOは、フランス、ベネズエラ、ウエバー、ヴィヴァルディ、ヒナステラ、リスト、チャイコフスキイなどの作品を演奏した。イェフィム・ブロンフマンとイラン・ロゴフがソリストとして加わった。訪問した都市は、モンティヴィデオ、ブエノスアイレス、サンパウロ、リオ・デ・ジャネイロなど。サンパウロの大学構内で行われたコンサートは特に興味深いものであった。

1982年5／6月、メキシコ、アメリカ、カナダ公演。この公演旅行中唯一のヨーロッパの都市であるボンからスタートした。指揮はバーンスタイン。続いてメキシコで6回、アメリカ（ヒューストンとグラス）で2回、フルートのランサム・ウィルソンとIPOのヴァイオリニスト、メナヘム・ブラームがソリストを務めた。その後アメリカ、カナダの各地でのコンサートはズービン・メータの指揮によるもので、ミルウォーキー、シカゴ、コロンバス、メンフィス、ワシントン、ニューヨーク、フィラ



イスラエル・フィルとニューヨーク・フィルとのジョイント・ガラ・コンサート (IPO側は白、ニューヨーク側は黒)

デルフィニア、トロント、オタワ、モントリオールで公演という大規模なものであった。ユリ・ビアンカ、シュロモ・ミンツ、イツァーク・バーレマン、及びオペラ歌手レオンティン・ブライスのソリストとしての参加を得た。ニューヨーク市アヴェリー・フィッシャー・ホールでのズービン・メータ指揮によるニューヨーク・フィルハーモニックとのジョイント・コンサートはこの公演旅行のハイライトであった。

1982年10月、IPOはこの年2度目の国外公演に出掛けた。こ

の時は短期のスペイン公演で、指揮はロベス・コボス、ソリストを IPO 団員のダニエル・ベニヤミニー（首席ピオラ）とハイム・タウブ（コンサートマスター）が務めた。2回のコンサートの新聞評は絶賛で、聴衆の暖かい反応も報道された。

1983年3月の日本公演は1960年以来のものであった。東京、名古屋、京都、甲府、福岡、大阪の6都市で9回のコンサートを行った。ズービン・メータの指揮による演奏会は、聴衆の反応からも批評の面でも大きな成功であった。批評の一例を挙げ

る。（サンケイ新聞より）“IPOは23年前のときと比べて成長した。他のオーケストラには見られない成熟ぶりである。比類のない質の良さをもっている。完成度の高い豊かな感受性を感じさせるオーケストラだ。”

同1983年の夏、IPOはヴェネズエラのカラカスと、ヨーロッパの音楽祭に出演。ヴェネズエラ政府の招きでカラカスを訪れたオーケストラは、国民的英雄ボリヴァーの生誕200年記念として4回のコンサートを行った。ヴェネズエラ公演を終了した IPO はその足でヨーロッパに飛び、8月24日のザルツブルグを皮切りに、ミュンヘン、ルクセンブルグ、ルツェルン、ストレサ、フランクフルト、ボン、ベルリン、ブリュッセル、ロンドン、パリ、フローレンスなど、著名音楽祭及び主要都市で公演し、9月18日と19日のヴェニスでの2回のコンサートで締めくくった。カラカスとヨーロッパのすべてのコンサートは、IPO の音樂監督マエストロ・ズービン・メータの指揮によるものであった。

マーラーの交響曲3番の演奏には、ほとんどの主要都市では、国際的名声のあるオペラ・スターのソプラノ、フローレンス・キヴィアルが共演した。ルクセンブルグ、ブリュッセル、及びヴェニスでは、IPO の首席コンサートマスター、ハイム・タウブがソリストを務めた。ベルリンでは、ウラジミール・アシケナージが IPO と共に、ロンドンではダニエル・バレンボイム、パリではショロモ・ミンツが出演した。

1984年5月、五月音楽祭の招きでフローレンスを訪れ、2回のコンサートを行った。レナード・バーンスタイン指揮による2回のコンサートは、マーラーの「こどもの不思議な角笛」で、ソプラノにルチア・ポップ、バリトンにウォルトン・グレーンの参加を得た。

1984年7月、IPOは、ズービン・メータの指揮のもと、オーストラリア及びカリフォルニアへ旅立った。オーストラリアは、1966年と1978年に次ぐ3回目の訪問である。この時もオーストラリア放送との契約によるものであった。またオーストラリア会長イスラエル・ブランクフィールド氏の指導により献身的な支援と多額の寄付を寄せてくれたオーストラリア IPO 友好協会の尽力も成功の一因であった。



イスラエル=レバノン国境でのコンサート

ベースで幕を開け、シドニー、キャンベラ、メルボルン、ブリスベンと続けられた12回のコンサートは、5種類のプログラムを順に演奏するものであった。ソリストにはヴァイオリニストのショロモ・ミンツ、IPO の首席ヴァイオリニストで監督理事会長でもあるダニエル・ベニヤミニー、及び才能豊かなオーストラリアのアルト、ローリス・エルムスを得た。

オーストラリア総督ニアン・スティーブン卿が招待した。オーストラリア首相 R.J.h.ホー閣下、イスラエル大使 Y.ベン・ヤアコブ閣下及びツエルマン・コーウェン閣下もパトロンとして名を連ねた。

オーストラリア巡演を終えた IPO はシドニーからサンフランシスコ足を伸ばし、2回のコンサートを行った。またロス・アンゼルスの “ハリウッド・ホール” では3回の野外コンサートを行ったが、そのうちの第1回のコンサートは、1984年オリンピックの開会式と同じくしてのものであった。この時のプログラム前半は、1972年のミュンヘン・オリンピックの際にアラブのテロリストによって命を奪われた11名のイスラエルのスポーツマンに捧げられ、イスラエル人作曲家ボール・ベン＝ハイムによる「葬歌」が演奏された。ロサンゼルス市長を含む各界の名士映画・演劇界のスターが聴衆の中に見られた。司会はグレゴリー・ペックが務めた。イツァーク・バーレマンがペートーベンのヴァイオリン・コンチェルトを演奏。

その他、サンフランシスコではショロモ・ミンツ、ハリウッド・ホールのマーラー第3交響曲にはフローレンス・キヴィアルがソリストとして出演した。

半径拡大 DCカード

新しいことを始める
自分の世界を広げる
そんなときDCカードは
あなたのたのもしい味方
今日のコンサート
とてもよかったです



- ショッピングにレジヤーに、世界の国々で共通にご利用になれる国際カードです。
- みなさまの暮らしをサポートする各種サービスがますます充実、頼りになる1枚です。

ダイヤモンドクレジット株式会社
本社 〒150 東京都渋谷区道玄坂1の3の2 ☎03(464)6611



DC CARD



開業5周年記念

街に、瞳に、秋のソナタ。

小田急
ホテルセンチュリー
HYATT

〒160 東京都新宿区西新宿1丁目7-2 TEL.(03)349-0111
大蔵宿営業所 〒150 東京都渋谷区道玄坂1-2-2 新田ビル703号 TEL.(03)365-7211
名古屋営業所 〒460 名古屋市中区栄1-13-2 爰誠第2ビル5階 TEL.(052)263-0462

CENTURY
THE CENTURY HYATT



タクトがおどる

心にしみるオーケストラの響き

白いページに余韻がのこる……。

プログラム、ポスター、チラシなどの企画・制作のご用命は
株式会社 東神堂 〒101東京都千代田区神田司町2-14 TEL 03(252)7611㈹

ふれあい。日本流。

海外からのお客さまに
充実した日本の旅850コース。

経済大国、それとも神秘の国。

日本に対する評価はそれぞれですが、

心のこもったおもてなしで

日本の本当の姿を見ていただくのはいかがですか。

日本交通公社のサンライズツアーアーは、

20年以上の歴史を持ち

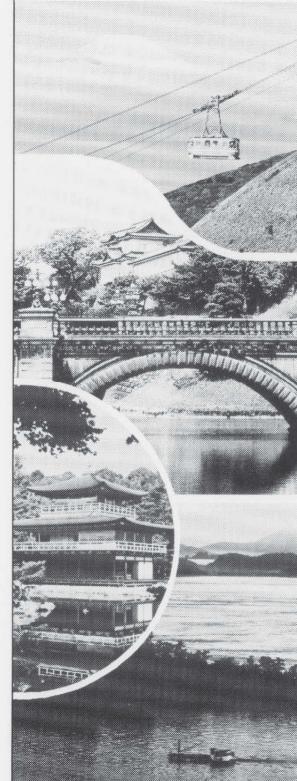
300万人以上のカたにご利用いただきました。

ご希望に合わせて、

日本の充実した旅を満喫していただけます。

外国からの大切なお客様は、

サンライズツアーアーにおまかせください。



Sunrise Tours

サンライズツアーアーは、海外からの大切なお客様のために、
日本全国の主な観光地をすべて網羅したパッケージ旅行です。
その種類は65本、ご希望に応じて更に850通りもの組み合わせができ、
ホテル・列車・バス・ガイドなどをすべて含んだ

パッケージ一豊かなコースです。

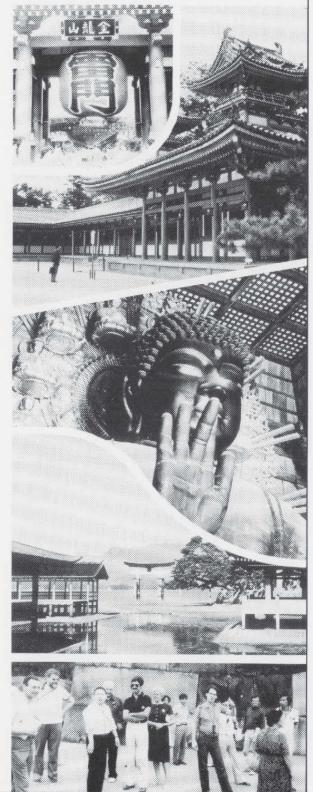
- ご予約は簡単。電話一本で即座に完了。
- パッケージ旅行なので、おひとりでもご利用になれ、しかもおトク。
- ツアーのほとんどが毎日運行されており、ご予約は前夜まで可能。

突然のお客さまに安心です。

サンライズセンター
東京 ☎03(276) 7777
毎日9:15-23:00(年中無休)

京都 ☎075(361)7241
★最寄りの各支店・主要旅行代理店でも受付けております。

運輸大臣登録一般旅行業第64号
jtb 日本交通公社 外人旅行事業部
〒103 東京都中央区日本橋1-13-1 日鉄日本橋ビル



チャイコフスキー記念「くるみ割り人形」

東京バレエ団

NBS

財団法人 日本舞台芸術振興会 JAPAN PERFORMING ARTS FOUNDATION

財団法人 日本舞台芸術振興会は、音楽・舞踊を主とする舞台芸術の普及向上を図るとともに、舞台芸術の国際交流を推進し、もってわが国の芸術文化の振興と発展に寄与することを目的として設立されました。

各種団体、公共機関と提携協力して、これまで民間個人の方では手が届かなかった芸術家育成事業の充実ならびに芸術団体への援助、および国内・国外の公演活動の活性化、国際交流の促進などにつとめ、微力ながら所期の目的を達成するため次のような事業を行ってまいりたく、広く皆様方の御支援、御協力をいただけますようお願い申し上げます。

1. 舞台芸術に関する公演の開催
2. 舞台芸術に関する芸術家及び技術者の育成
3. 舞台芸術に関する国際交流
4. 舞台芸術に関する資料の収集及び調査研究
5. 機関紙及び舞台芸術に関する出版物の刊行
6. その他目的を達成するために必要な事業

理事長 坊 秀男

専務理事 佐々木忠次

常務理事 長畠 寛照 吉田 貴壽

理事 姉小路公経 渡田 智 竹内 道雄 橋本 明治 福原 厚信
森 治樹 古國 二郎 吉田富士雄 吉久 勝美

監事 大倉 真隆 川北 博

顧問 安達 健二 横田喜三郎

財団法人 日本舞台芸術振興会／〒152 東京都渋谷区八雲5-1-20 / tel.(03)723-2356(代)

「イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団」
来日演奏会プログラム

写真提供:イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団
駐日イスラエル大使館
ボリード株式会社
S. Bayet H. Grossman
財団法人川喜多記念映画文化財団

発行:日本舞台芸術振興会

編集:ジャパン・アート・スタッフ

© Printed in Japan 1985

翻訳:小出照子/酒井洋子
印刷:刷:東神堂

